

順であった。経年比較では、第1位の「人間関係」は、過去3回その比率は毎年低下している。また第2位の「経済的豊かさ」も前回よりも2.1ポイント減少し、低下した。一方、第3位の「社会貢献」は前回より3.9ポイント増加し、前回5位から3位へと繰り上がった。学年別にみると1年生から4年生まですべての学年では「人間関係」の選択率が最も高い。2位の「経済的豊かさ」では、1年生(21.7%)から4年生(14.1%)への学年進行と共に選択率が低くなり、逆に「社会貢献」では、1年生(9.9%)から4年生(19.8%)と学年進行と共に選択率が高くなっているのは、入学後の変化として注目に値する。入試形態別では、外国人留学生入試の入学者では、1位「経済的豊かさ」(40.0%)次いで「技能や能力」(30.0%)「心身の健康」(30.0%)の順となっているのは、そのほかの入試では全体の傾向と同じ順である。スポーツ能力に優れた者を対象とした入試、特別選抜入試(スポーツ活動)の入学者では、「人間関係」(56.3%)と高い比率で選択しているところが特徴である。

大学生活への心理的不適応(Q13)では、「特別な理由もなく時々学校を休みたくなる」や「必要な授業だと思っているのに、どうも足が向かない」など15の短文を示し、この内容に対して「はい」か「いいえ」の回答をしてもらった。得点の分布可能範囲は0～15点で、得点が高いほど不適応の度合いが高いことを表わす。全体の平均値は、5.1であった。

学部別では、社会学部が5.1で平均値であり、平均値より低いのは、文学部(4.8)、商学部(4.9)、人間福祉学部(4.9)、教育学部(4.4)、国際学部(3.9)であり、比較的新しく開設された教育学部、国際学部で健康度が高い結果となった。逆に平均値より高いのが、理工学部(5.8)、経済学部(5.6)、総合政策学部(5.3)、法学部(5.2)であった。

学年別の傾向では、前回同様に学年が上がるに従い不適応得点が下がる傾向にあるが、今回は2年生が1年生よりも若干高くなっている。

男女別では、前回同様女性(5.0)より男性(5.2)の不適応点が高くなっている。

住居別では、今回は自宅外生(5.4)が自宅生(4.9)より高い結果となった。(前回は両者の差が全く見られなかった)。

団体参加別では、団体参加者(4.9)より団体不参加者(5.5)の不適応点が高かった。前回と同様の結果となった。

最後に全体として今後とも各項目の傾向や変化を見逃さないように注意深く見ていく事が大切であるが、今回の調査結果の中では、学年別では、3年生、男女別では女性、GPAでは2番目(2.00～3.00)の層に特徴が現れていると感じた。これらからは時代の先取りの兆候、次に起こってくる現象の前触れといった特徴を見ることが出来る。特に就職活動が始まる前の3年生に注目して分析していくことが必要であると思われる。

4. 大学施設

(1) アメニティ(Q24)

学内のアメニティ(生活環境の快適さ)を調査するため、教室、食堂、トイレについて、それぞれ5段階(とても快適、まあまあ快適、普通、あまり快適と思えない、不快)で評価をしてもらった。その結果は以下の通りであった。

①教室について

教室についての回答結果を図4-1-1に示す。キャンパスの快適さ(教室部門)では、全体で64.7%が「とても快適+まあまあ快適」(以下「満足」)と回答している。逆に「不快+あまり快適と思えない」(以下「不満足」)と回答した学生が6.5%で、「普通」28.7%であった。おおむね教室(授業・学習)環境については、満足できていると推察される。

これを学部別にみると、満足の多い順位では、神学部(100%、但し、回答者4名)、国際学部(86.1%)、人間福祉学部(85.1%)、文学部(72.9%)、社会学部(71.1%)、総合政策学部(70.3%)教育学部(60.5%)、法学部(56.6%)、経済学部(56.4%)、商学部(51.6%)、理工学部(48.0%)で平均は64.7%となっている。神学部は回答者が少ないので対象外として、国際学部、人間福祉学部は、西宮上ヶ原キャンパスで最も新しいG号館を使用することが多いため比較的快適という結果となっていると推測する。しかし学内で最も古い建物の1つである文学部で72.9%となっている。

また、神戸三田キャンパスの比較的新しい理工学部で48.0%となっている。今後その原因はどこにあるのかを究明することが必要である。

これを男女別にみると、男性は57.7%、女性は69.9%が「満足」(とても快適+まあまあ快適)と答えている。結果、男性よりも女性が快適と感じていることになる。

これを学年別にみると、1年生(65.0%)、2年生(62.1%)、3年生(58.2%)と低下し、4年生(71.9%)と逆に高い数値となっている。推測の範囲でしかないが、4年生は平均して授業に出る回数が少なくなっていること、あるいは4年間を振り返って快適さが増してきたという実感からということが考えられる。

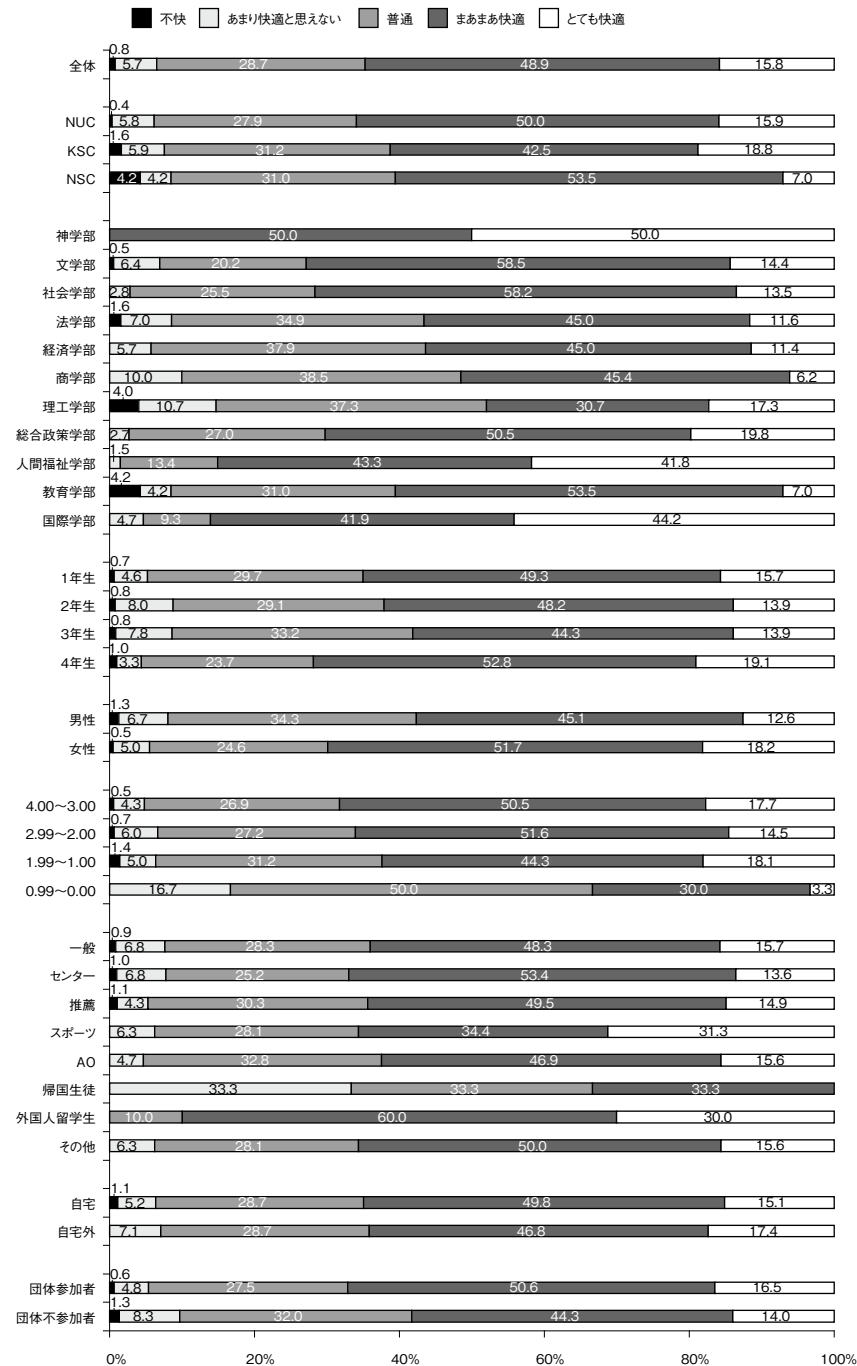
その他GPAでみると1.00未満では33.3%となっているが、1.00以上では、全体平均の64.7%とあまり差がみられない。入試形態の違いでは、回答者の少ない外国人留学生入試や帰国生徒入試を除くと違いはみられない、自宅・自宅外においても大きな違いはみられない。団体に入っているかどうかでは、入っている者が「満足」67.1%で、入っていない者が58.3%となっており、入っていない学生の方が教室環境について、よりシビアにみていると推察される。

Q24. あなたは本学のアメニティ(生活環境の快適さ)についてどう感じますか。A 教室、B 食堂、C トイレ、それぞれについて5段階で評価してください。

A 教室
B 食堂
C トイレ

1 不快
2 あまり快適と思えない
3 普通
4 まあまあ快適
5 とても快適

図4-1-1 生活環境の快適さ(教室)(Q24)



② 食堂について

食堂についての回答結果を図4-1-2に示す。キャンパスの快適さ(食堂部門)では、やはり「不快+あまり快適と思えない」(以下「不満足」)との回答が33.0%(約1/3)に達し、一方「とても快適+まあまあ快適」(以下「満足」)は28.4%で「不満足」が「満足」を上回った。また「普通」と回

答した者は、38.7%ともっとも多い結果となった。

これを学部別にみると、「不満足」の多い順に、教育学部(49.3%)、社会学部(39.7%)、法学部(34.2%)、文学部・商学部(32.4%)、理工学部(30.7%)、人間福祉学部(29.9%)、総合政策学部(28.8%)、次いで経済学部(28.6%)、神学部(25.0%)、国際学部(16.3%)となっている。これが必ずしも「満足」の裏返しではないがこの「不満足」の原因を探り、解消することが今後の課題であるとする。

これを学年別にみると、1年生(27.2%)、2年生(30.3%)、3年生(36.9%)、4年生(37.7%)と学年が上がるに従って「不満足」が増加している。

なお、男女別、GPA別、自宅・自宅外、団体に入っているか否かでは、平均と大きな差がない。入試形態別では、「スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)」の「満足」(50.0%)が平均より飛びぬけている。

食堂利用については、食堂を整備しているKSCを除いて、だいたいどの指標も、「不満足」>「満足」である。また教育学部を除くとどの学部においても「普通」つまり「どちらでもない」が最も多い。教育学部では「あまり快適と思えない」(40.8%)が最も多い。「不満足」が多い中でも、KSCにおいて「満足」が少し高いのは、周囲に食堂等の店がないこともあり、学内の食堂の利用度が高いためと推測する。

③ トイレについて

トイレについての回答結果を図4-1-3に示す。キャンパスの快適さ(トイレ部門)では、全体的に「満足」(「とても快適」+「まあまあ快適」)が55.2%で、「不満足」(「不快」+「あまり快適と思えない」)が14.3%で、「普通」(30.5%)となっている。

学部別にみると、「満足」(とても快適+まあまあ快適)の多い順に、人間福祉学部(85.1%)、国際学部(83.7%)、総合政策学部(75.6%)、神学部(75.0%)、理工学部(70.6%)、社会学部(60.2%)、文学部(58.0%)、経済学部(42.1%)、法学部(38.7%)、商学部(38.5%)、教育学部(29.6%)、平均(55.2%)となっている。「不満足」(不快+あまり快適と思えない)では、多い順に、法学部(29.5%)、教育学部(29.5%)、商学部(26.9%)と続いている。

男女別にみると、「満足」では大きな差はみられないが、「不満足」が男性(11.0%)に対して女性(16.7%)と女性が6ポイント弱上回っている。

GPA、自宅・自宅外では大きな差はみられないが、入試形態では、「スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)」の「満足」が68.7%と平均55.2%より飛びぬけて高い。

また、団体に入っている者と入っていない者では、「不満足」では大きな差がみられないが、「満足」では58.0%と47.6%と大きな差が出ている。

全体としては約半数が快適と感じていることになるが、「快適」の基準をどこにおくかは、個人によって異なっている。また学内でも新しい校舎と古い校舎のトイレでは快適さが異なっているので、少なくとも基準を学内の最も新しい校舎のトイレにおき、そして「不満足」(「不快」+「あまり快適と思えない」)の度合いを改善目標にするべきであるとする。

図4-1-2 生活環境の快適さ(食堂) (Q24)

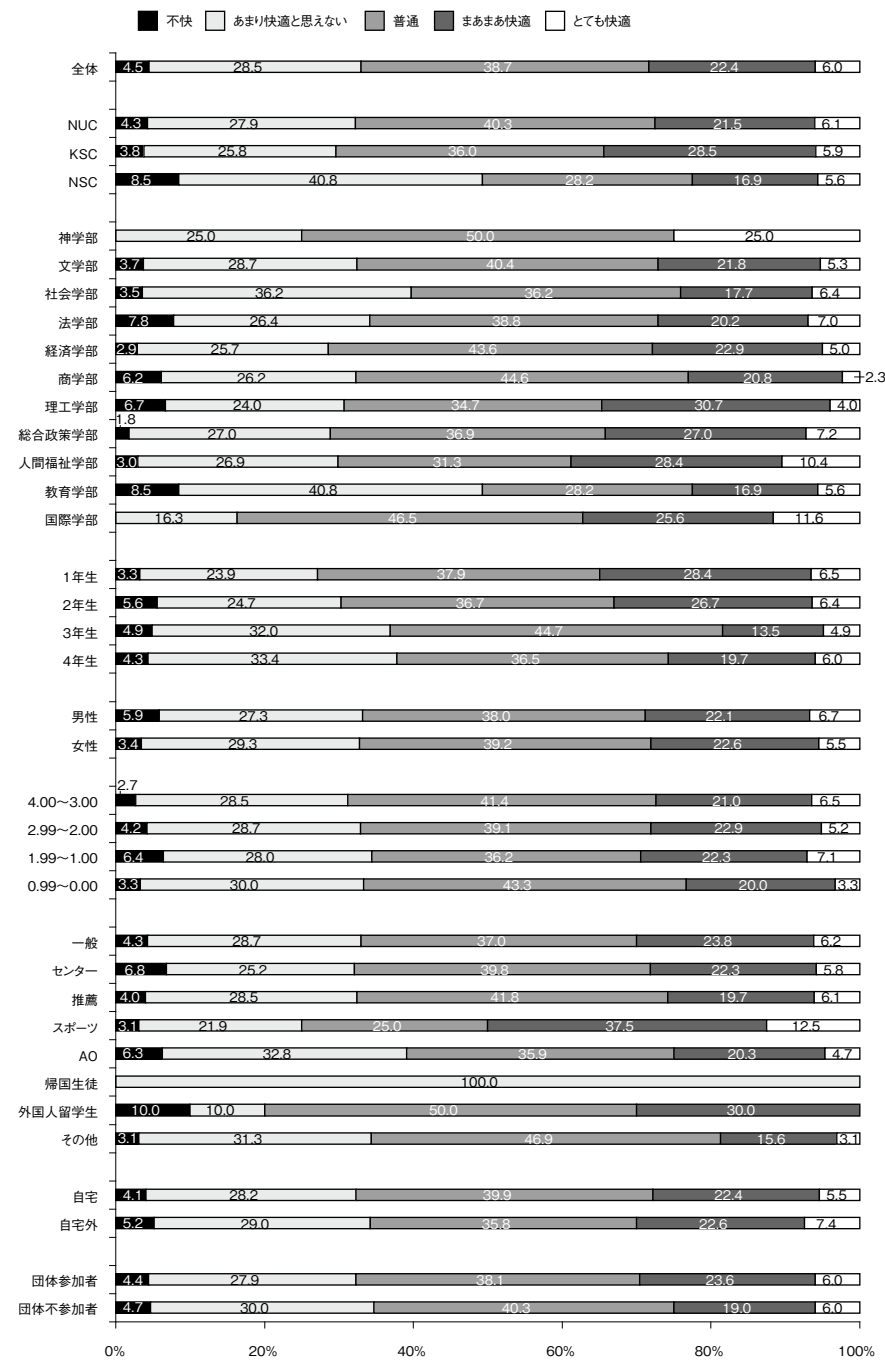
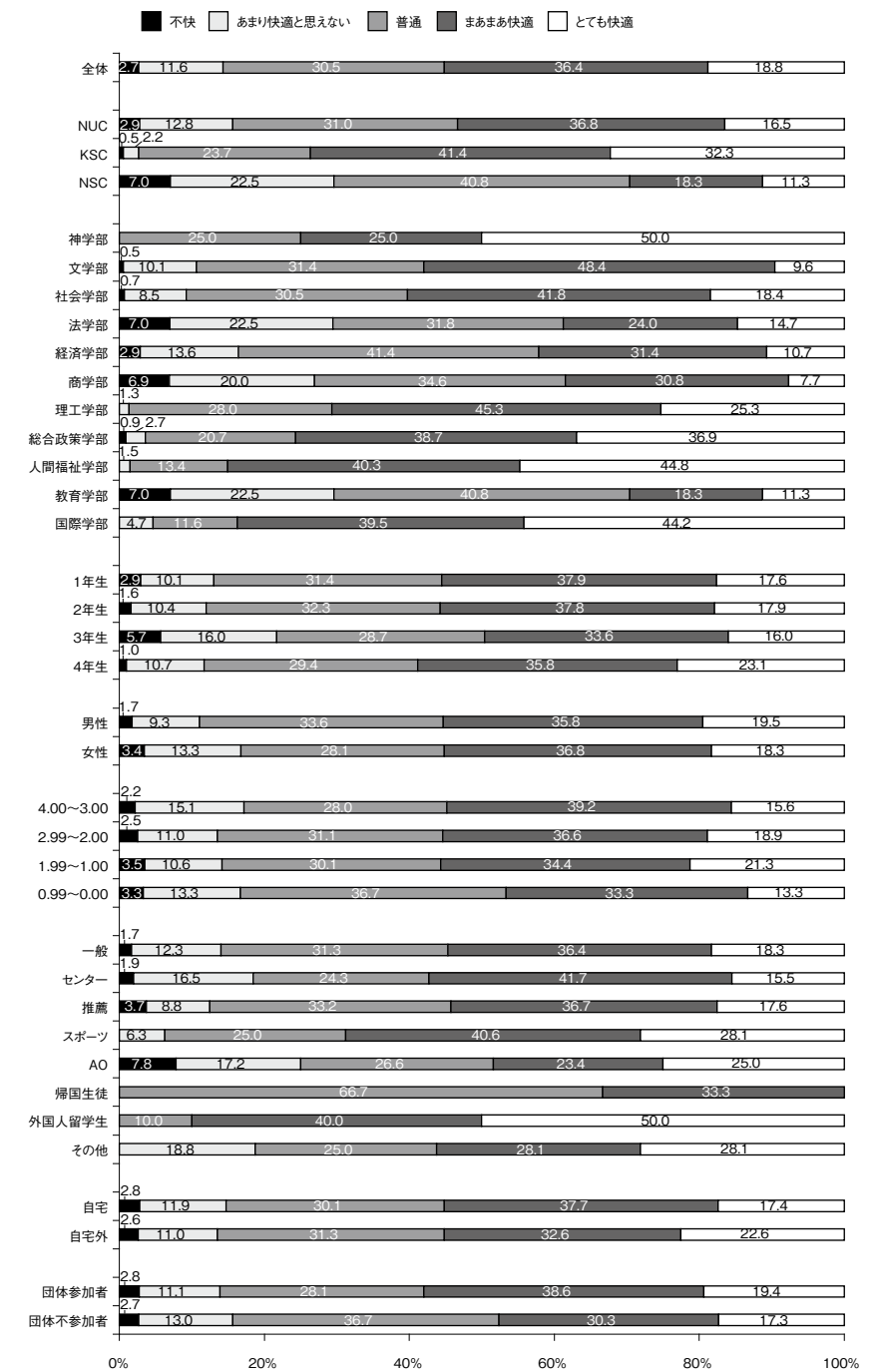


図4-1-3 生活環境の快適さ(トイレ) (Q24)



(2) 通学手段 (Q22)

Q22では、通学についてたずねた。

①最寄り駅

最寄り駅についての回答結果を図4-2-1に示す。西宮上ヶ原キャンパス (以下NUC) にある学部に通う学生の60.8%は阪急甲東園駅から、31.5%が阪急仁川駅からとなっていて、甲東園駅から仁川駅からの比率が2:1となっている。この2駅で92.3% (2010年度の調査ではこの2駅で97%以上だった) でその他10.9%となっている。JR新三田駅を指定している者が1名いたが、質問を自宅の最寄り駅と読み違えたのではないかと思われる。

神戸三田キャンパス (以下KSC) にある学部に通う学生の62.5%がJR新三田駅から、19.9%がJR三田駅からとなっていて、その比率は3:1となっている。その他の14.7%には、神鉄の各駅あるいはJR三ノ宮駅を最寄の駅としていると推測される。ここでも質問を読み違えたのか門戸厄神駅や甲東園駅を指定している者がいた。

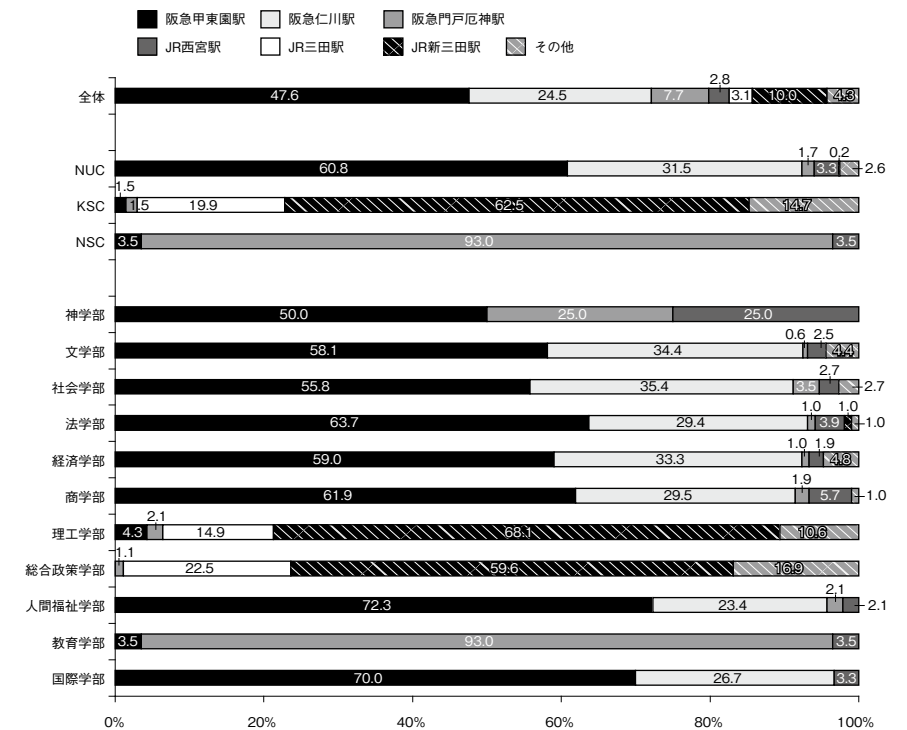
西宮聖和キャンパス (以下NSC) の教育学部に通う学生は、阪急門戸厄神駅を指定している学生が93.0%に達している。その他は、阪急甲東園やJR西宮を指定している。彼らは駅からバスを利用して通学していると思われる。

NUCの学部別では、仁川駅を大学最寄り駅としている学生は社会学部と文学部、および経済学部が多く、他の学部では甲東園駅が多くなっていた。同じキャンパス内でも、学部棟により近い駅から通う学生が多いのではないかと推察される。

JR三田駅を最寄り駅にしているのは総合政策学部が22.5%で、理工学部が14.9%を上回っているが、JR新三田駅では逆に理工学部が68.1%で、総合政策学部の59.6%を上回っている。

阪急門戸厄神駅は教育学部生が圧倒的に多く、93.0%を占めているが、NUCの学部生も僅かながらこの駅を指定している。なお、法学部生がJR新三田駅を指定している理由、および門戸厄神駅を指定しているKSC学生が複数名いるが、その理由については、不明である。

図4-2-1 大学最寄り駅 (Q22-1)



- Q22-1. 通学についてお尋ねします。
公共交通機関を利用している方にお尋ねします。大学最寄り駅はどこですか。
- 1 阪急甲東園駅 2 阪急仁川駅 3 阪急門戸厄神駅
 - 4 JR西宮駅 5 JR三田駅 6 JR新三田駅
 - 7 その他 ()

- Q22-2. 大学最寄り駅または自宅から大学までの通学手段は何ですか。
- 1 徒歩 2 バス 3 自転車
 - 4 50cc以下のバイク 5 その他 ()

- Q22-3. 大学最寄り駅から自転車、バイクで通学している方にお尋ねします。
自転車・バイクを最寄り駅付近のどこに置いていますか。
- 1 駐輪場を借りている 2 一時預かりの駐輪場に置いている
 - 3 友人宅に置いている 4 不法駐輪している
 - 5 その他 ()

②通学手段

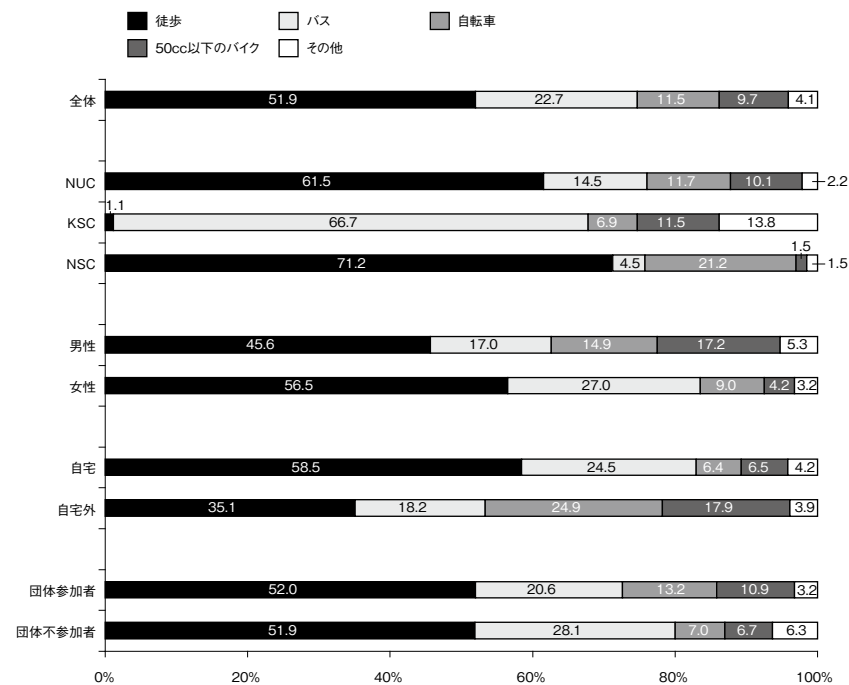
通学手段についての回答結果を図4-2-2に示す。KSCにおいてバス通学者が66.7%と圧倒的に多いのは、最寄りの駅から遠いためと思われる。また、自動車通学が許可制で認められており、その他の13.8%にはこれが含まれているものと思われる。周辺のいずれの駅からも遠いKSCであるが、徒歩で、としている学生が1名いた。NSCでは71.2%が徒歩、バス通学者4.5%は「上ヶ原」までバスで上がり、そこから徒歩で移動している学生だろうと思われる。原付通学は禁止されているが、NUCに停めている学生がいる可能性もある。NUCでは徒歩が61.5%と過半数を占め、ついでバスの14.5%となっている。これらの合計は、76.0%であった。2010年度の調査では90%を超えていた。今回、増加したのは自転車(11.7%)と原付(10.1%)による通学である。

なお、NUCおよびNSCで「その他」が指す通学手段については不明である。

男女別にみると、男性より女性の方が徒歩やバス通学の割合は多いが、自転車や原付の割合は男性の方が多くなっている。

自宅、自宅外による違いでは、自宅生の過半数(58.5%)が徒歩、24.5%がバス通学であるのに対して、自宅外生はそれぞれ35.1%、18.2%と少なくなり、逆に自転車や原付がかなり増加している。何かしらの課外活動団体に所属しているかどうか、による違いについては、どこにも所属していない学生のバス通学率がやや高くなっており、どこかに所属している学生については逆に自転車・原付通学率がやや高くなっている。帰宅時間が遅くなることや、キャンパス間の移動などが、その要因ではないかと推察される。

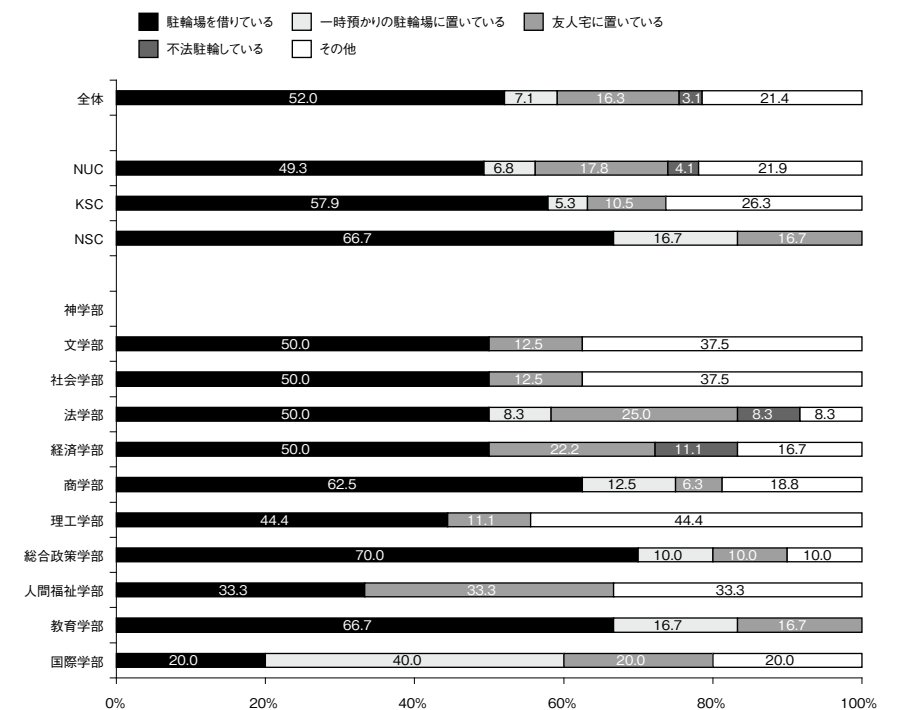
図4-2-2 最寄り駅または自宅から大学までの通学手段(Q22-2)



③駐輪場

大学最寄り駅から自転車や原付で通学していると回答した学生にのみ、どこにそれらを停めているのか、質問をした(全学部・キャンパス)。回答結果を図4-2-3に示す。過半数は「駐輪場を借りている」(52.0%)あるいは「一時預かりの駐輪場に置いている」(7.1%)としているが、堂々と「不法駐輪している」と回答した学生も3.1%おり、残念な結果となった。「その他」の21.4%が何をさしているのか不明である。

図4-2-3 自転車・バイクの駐輪場所(Q22-3)



(3) 大学での昼食 (Q23)

① 昼食をどのようにとるか? (何を食べるか?)

大学での昼食についての回答結果を図4-3-1に示す。全学では「弁当や惣菜などを買って食べる」が37.2%、次に「自宅から持ってきた弁当などを食べる」が29.8%の順で、食堂利用は3番目、28.9%となっている。食堂（業者等を含む）で作られるものを食べる学生が1/3未満であり、大半が弁当に頼っている要因が、食堂の狭さや時間のなさにあるのではないかと懸念される。また、僅かだが「食べない」（2.9%）もあり、その理由が、以前に取り沙汰された「便所飯」（一緒に食事をする相手がおらず、一人で食事をするところを他人に見られたくない）と同等の理由でないことを願っている。

学部（キャンパス）別に見ると、KSCの食堂利用率（理工学部63.5%、総合政策学部57.8%、全体60.1%）は、かなり高くなっている。一方で、「弁当や惣菜などを買って食べる」率（理工学部21.6%、総合政策学部27.5%）がかなり低くなっている。NUCでは「弁当や惣菜などを買って食べる」が1位42.9%で、NSCでは「自宅から持ってきた弁当などを食べる」が1位41.5%となっている。これらの違いはキャンパス周辺の環境が大きく影響していると思われる。

学部別に「食堂で出されるものを食べる率」を比較してみたところ、神学部はサンプル数が少ないので対象外として、生協エリアから遠い文学部や社会学部では20%未満となり、比較的近い法学部、経済学部、商学部、人間福祉学部で20%を超える。ただし、国際学部は15.8%と社会学部より少ない。実はG号館にある学部の人間福祉学部、国際学部は、昼食もG号館で完結しようとする学生が大多数を占めているという話を聞いたことがある。コンビニやファストフード店が入っているG号館では、弁当や惣菜を買って食べる率が、人間福祉学部で44.6%、国際学部で52.6%となっている。そこに近い商学部でも同項目の割合が51.6%となっている。

男女別に見ると、男性は食堂で食べる率が最も高く（46.9%）、自宅から持ってきた弁当などを食べる率はかなり低くなる（15.0%）。一方、女性は自宅から持ってきた弁当などを食べる率が最も高く（40.8%）、ついで弁当や惣菜を買って食べる率がほぼ同じ（40.5%）である。食堂は敬遠されている可能性がある（15.6%）。女性の場合、食堂にいても、持参した弁当を食べているケースが見られる。

図4-3-1 昼食をどのようにとるか (Q23-1)

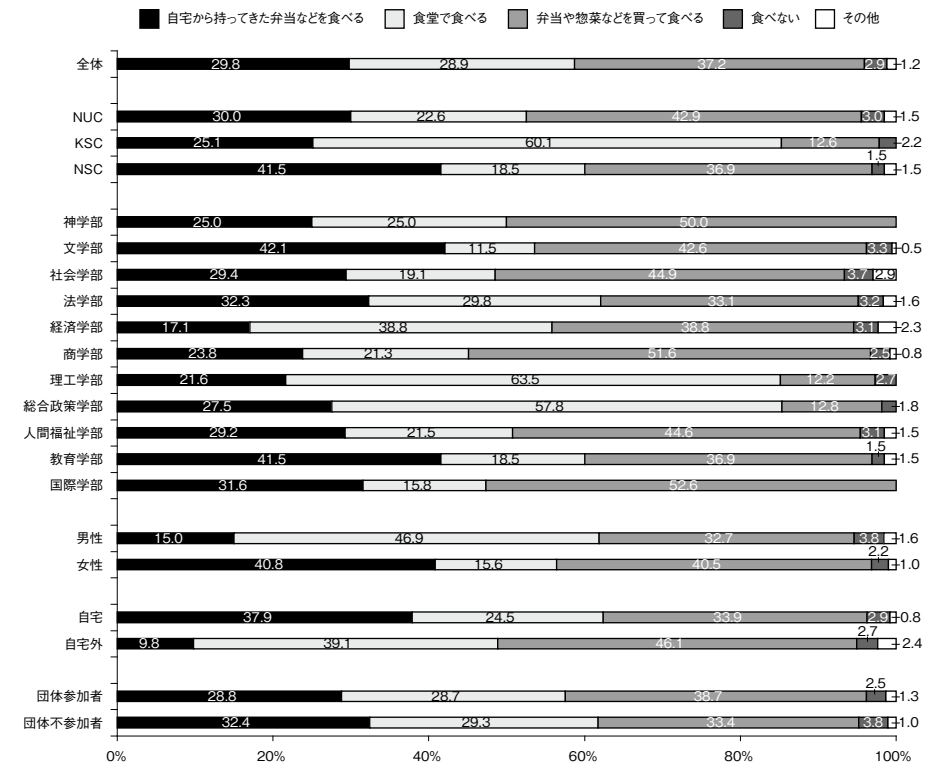
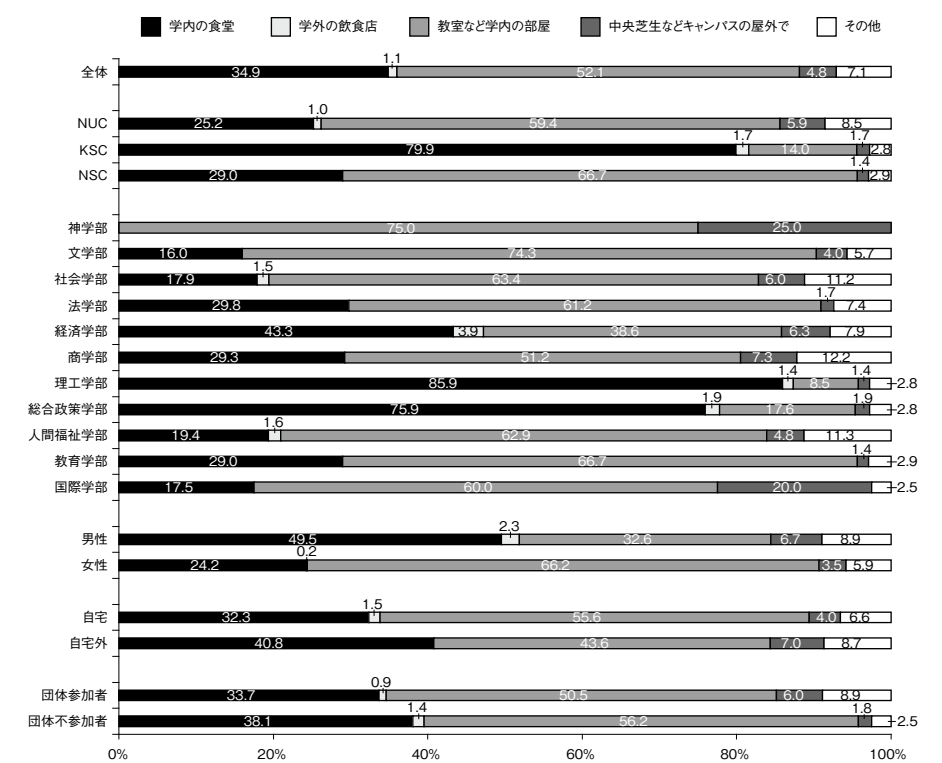


図4-3-2 昼食をとる場所について (Q23-2)



Q23-1. あなたは大学で昼食をどのようにとりますか？

- 1 自宅から持ってきた弁当などを食べる
- 2 食堂で食べる
- 3 弁当や惣菜などを買って食べる
- 4 食べない
- 5 その他 ()

Q23-2. あなたは昼食をどこでとりますか。

- 1 学内の食堂
- 2 学外の飲食店
- 3 教室など学内の部屋
- 4 中央芝生などキャンパスの屋外で
- 5 その他 ()

自宅生よりも自宅外生の方が食堂利用率は高い(24.5%に対して39.1%)。自宅外生が「自宅から持ってきた弁当などを食べる」はきわめて低く(9.8%)、逆に自宅生が37.9%ときわめて高い。また自宅外生の「弁当や惣菜などを買って食べる」は、46.1%と極端に高いのに驚かされる。おそらく、ここには通学途中のコンビニ等で購入したものも含まれているものと推察される。

団体に所属しているかどうか、による違いについては、それほど大きな差はない。

②昼食を食べる場所(どこで食べるか?)

昼食を食べる場所についての回答結果を図4-3-2に示す。全学的に最も多いのは「教室など学内の部屋」(52.1%)となった。短い昼休み休憩の間に、移動して、並んで注文して…という時間を省こうとする結果ではないかと推察される。学外の飲食店でとる率は、1.1%と極端に少なくなっているが、これはNUCにおいてもキャンパス周辺に飲食店が少なくなったため、当然の結果であろう。

キャンパス別に見ると、食堂で昼食をとる率がダントツに高いのはKSC(理工学部85.9%、総合政策学部75.9%、全体79.9%)である。そのKSCでもわずかであるが、理工学部1.4%、総合政策学部1.9%、全体1.7%と学外でとっている学生もいる。過半数が教室などの学内施設でとるNUCとNSCだが、NSCでは教室など施設の利用率(66.7%)はきわめて高くなっている。NUCでは中央芝生や日本庭園などキャンパス内の屋外に食事をとれる場所が多く、緩和につながっている。

男女別にみると、食堂で食べる割合が男性49.5%とほぼ半数であるのに対して、女性の食堂利用の割合が24.2%で、教室など学内施設でとる割合が男性33.6%に対して女性は66.2%に達している。特に女性にとっては、昼食は食べるだけでなく、おしゃべりの場でもあり、食堂では混雑していてゆっくりできないといったことが利用しにくい理由なのではないだろうか。

自宅、自宅外による特徴は、自宅外生の食堂利用率(40.8%)が、自宅生(32.3%)より高かった。自宅生の中には、通学途上で学外の店に入るという選択をする学生もいる(1.5%)。

団体に所属しているか否かでは、割合的に大きな差はみられなかった。

いずれにせよ教室など学内の部屋で昼食をとる学生が多くなっている。このことから学生数が増加し、食堂が狭隘となっていることが明らかである。また食堂で順番を待つ時間を考えて、弁当や惣菜を買って食べる方が時間の節約であると考えている学生もいると推測できる。

(4) 喫煙(Q25)

Q25では喫煙についてたずねた。回答結果を図4-4-1に示す。全学生でみると、喫煙率は4.9%である。男女別に見た場合の喫煙率は男性8.9%、女性2.0%であった。

キャンパス毎の学部平均では、大きな差は見られない。

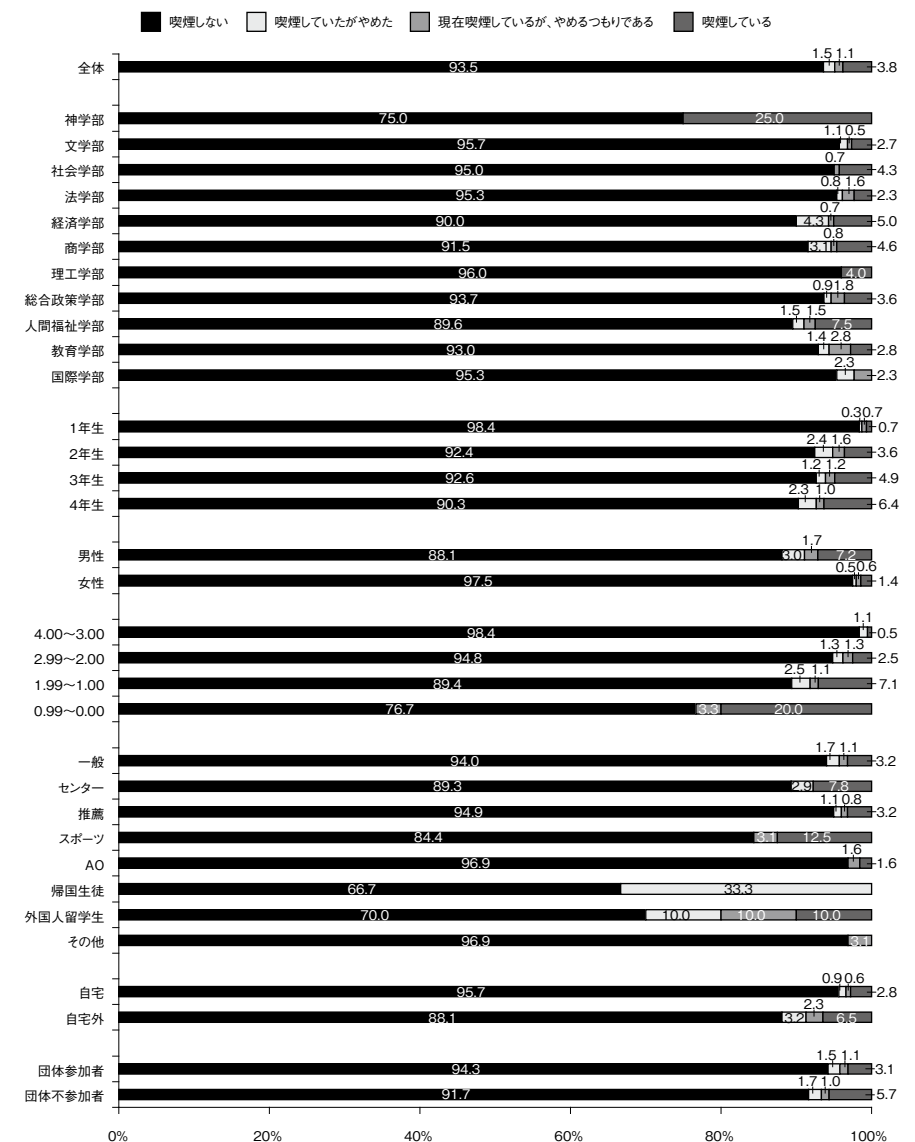
次に、自宅生の喫煙率は3.4%であるが、自宅外生の喫煙率は8.8%で自宅外生が高かった。

クラブ・サークルや団体に入っている学生の喫煙率は4.2%であり、入っていない学生は6.7%で少し高くなっている。

Q25. あなたは喫煙しますか。

- 1 喫煙しない
- 2 喫煙していたがやめた
- 3 現在喫煙しているが、やめるつもりである
- 4 喫煙する

図4-4-1 あなたは喫煙しますか(Q25)



(5) 図書館サービス (Q19)

大学図書館が提供している各種サービスや近年新たに設置したコーナーに配架している資料が、学生にどの程度認知され、利用されているかを回答から読み取るにあたって、前回調査と同様に次の基準を設けて分析した。

- ・認知度の測定においては、「よく利用する」「ときどき利用する」「知っているが利用したことはない」と回答したものをまとめて「コーナーやサービスの存在を認知している」とする。
- ・利用経験に関しては、「よく利用する」と「ときどき利用する」と回答したものを「利用経験あり」とし、「知っているが利用したことはない」と「存在を知らなかった」と回答したものを「利用経験なし」とする。

今回の調査では、大学図書館に関するQ19の各回答と回答者のGPAとのクロス集計の結果が得られた。それによると、大学図書館が提供する資料やサービスの認知度および利用経験において、GPAが3.00以上の層と3.00未満の層とで明確な差が見られた。GPAの数値が大きい学生ほど、OPAC (大学図書館蔵書検索システム) やWebデータベースをよく利用しており、学内に所蔵がない図書や論文を必要とする場合はレファレンスカウンターで相談して、他大学図書館との相互利用制度で入手していることが数値から読み取れる。つまり、大学図書館を上手く利用している学生は、そうでない学生と比べて良い成績を取っているという相関関係があると言えるだろう。

「コーナーの資料」

大学図書館では、教育・研究・学習をサポートする図書・資料の提供という原則に加えて、この数年にわたり学生の教養や余暇の読書ニーズを満たすような資料を集めたコーナーの設置や充実に力を入れてきた。その方針がどの程度学生に認知され、利用されているかの成果を見る手段として、今回の調査は有意義であった。

全体的な傾向として学年が上になるにつれて認知度も利用経験も上がるが、「レポート・論文作成図書コーナー」だけは新入生が履修する基礎演習対象の文献探索講習会で積極的に紹介していることもあって、1年生が最も認知度も利用経験も高くなった。

学部別では、どのコーナーにおいても教育学部生の認知度ならびに利用経験が他学部生と比べて低かった。各質問に対して「存在を知らなかった」と回答した割合において、最高値の教育学部と最低値の国際学部との間には20～33ポイントの差がついた。教育学部生は日常的に西宮聖和キャンパスの聖和短期大学図書館 (教育学部分置資料も所蔵) を利用しているため、大学図書館に来ることが少ないからと考えられる。

「図書館サービス」

レファレンスカウンターで提供しているレファレンスサービス、学内外の相互利用、購入希望制度においては、認知度・利用経験ともに学年別では4年生が最も高く、GPAにも比例している。このようなサービスに関しては居住地や課外活動の所属の有無によって回答の傾向に違いはない

が、「学期中の日曜日の開館」だけは前回調査と同様に大きな差が見られた。自宅外に居住している学生と課外活動に参加するために休日にも大学に来ることが多い学生は日曜日に大学図書館が開いていることを知っていて、利用しているようである。

「オンラインサービス」

大学図書館ホームページやOPACを経由して、来館しなくても蔵書の検索や予約をしたり、論文や新聞記事を探したりできる各種オンラインサービスを提供している。これらのサービスの利用経験も学年とGPAに比例して上昇している。学部別では、教育学部と他の学部との差がほとんどないのは喜ばしい。オンラインサービスの認知度および利用経験が高いのは国際学部と総合政策学部、社会学部で、学際的な分野を幅広く学ぶ学生にはニーズが高いと思われる。

Q19. 図書館の以下のサービスの利用についてお答えください。

		よく利用する	ときどき利用する	知っているが利用したことはない	存在を知らなかった
コーナーの資料	新着図書コーナー	4	3	2	1
	先生のお薦めの本コーナー	4	3	2	1
	レポート・論文作成図書コーナー	4	3	2	1
	新聞書評コーナー (西宮上ヶ原: 読売新聞、神戸三田: 朝日新聞)	4	3	2	1
	上ヶ原のラウンジ、神戸三田のブラウジング	4	3	2	1
	新書・文庫コーナー	4	3	2	1
図書館サービス	期間中の日曜日の開館	4	3	2	1
	レファレンスサービス	4	3	2	1
	他キャンパスで所蔵している雑誌論文等のコピーの取り寄せ	4	3	2	1
	学内に所蔵がない図書の他大学からの取り寄せ (相互利用・図書貸借)	4	3	2	1
	雑誌論文等の他大学からのコピーの取り寄せ (相互利用・文献複写)	4	3	2	1
	他大学図書館での資料の閲覧 (相互利用・閲覧利用)	4	3	2	1
オンラインサービス	購入希望制度	4	3	2	1
	大学図書館ホームページ	4	3	2	1
	OPAC (関西学院大学図書館蔵書検索システム)	4	3	2	1
	OPAC での貸出中の図書の予約申込	4	3	2	1
	OPAC での他キャンパスからの図書の取り寄せ	4	3	2	1
	OPAC での借りている図書の貸出期間の更新	4	3	2	1
	図書館が提供している Web データベース (CiNii, 日経テレコン 21 など)	4	3	2	1
図書館が提供している電子ジャーナル	4	3	2	1	
図書館が提供している電子ブック	4	3	2	1	

図4-5-1 図書館サービス利用(全体)(Q19)

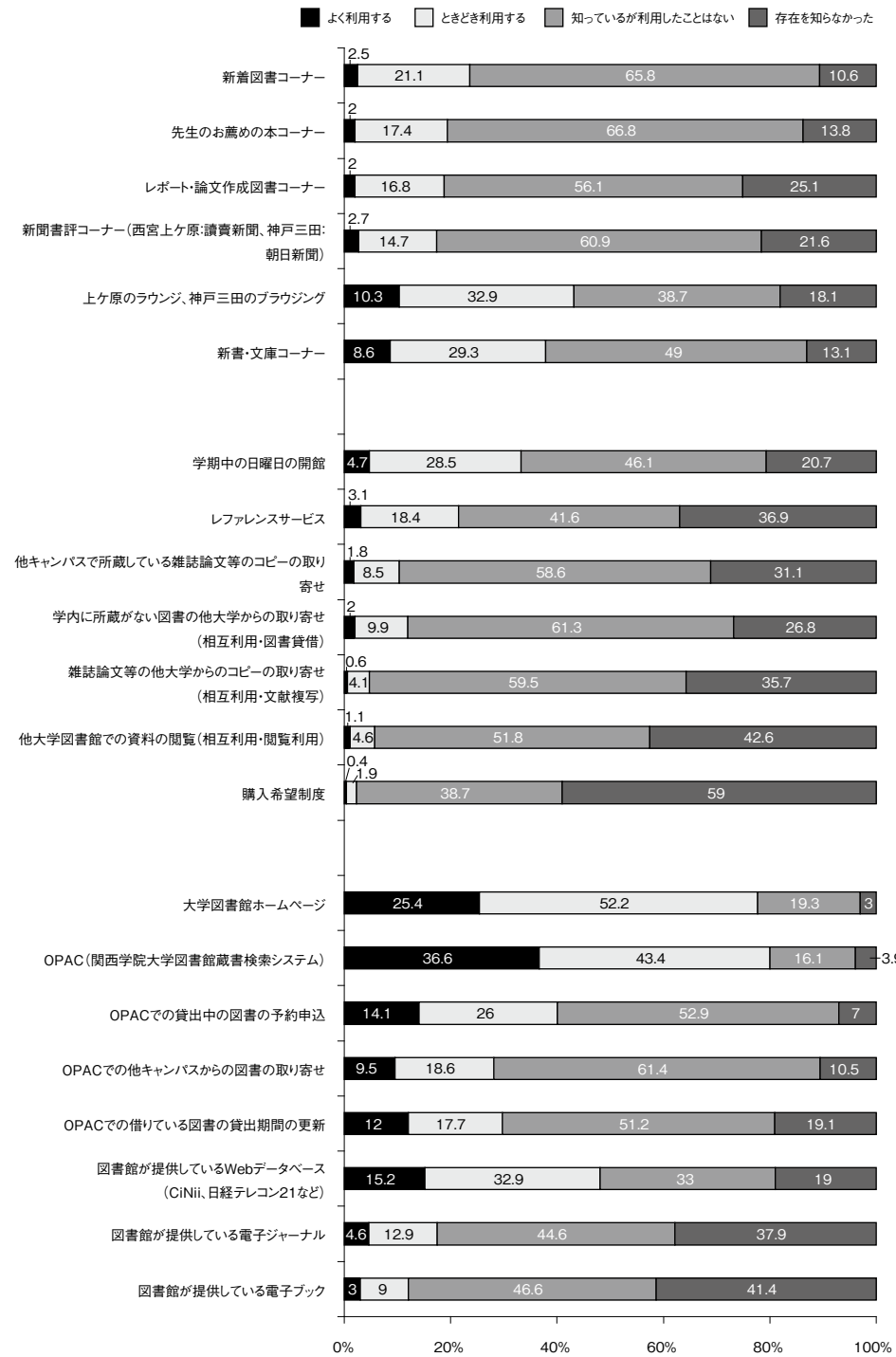


図4-5-2 「コーナーの資料」新着図書コーナー(Q19)

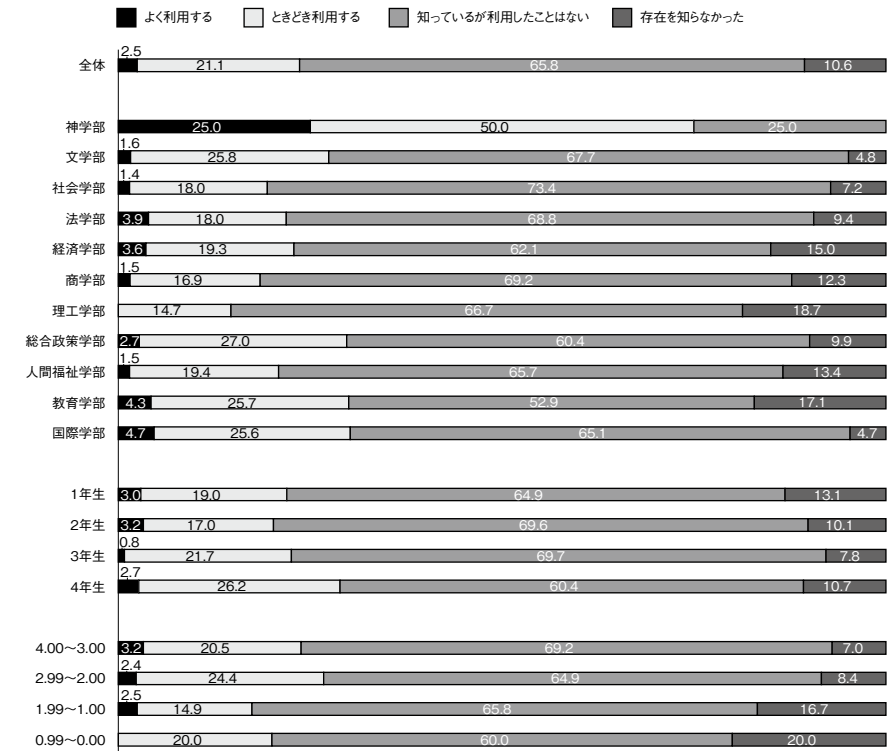


図4-5-3 「コーナーの資料」先生のお薦めの本コーナー(Q19)

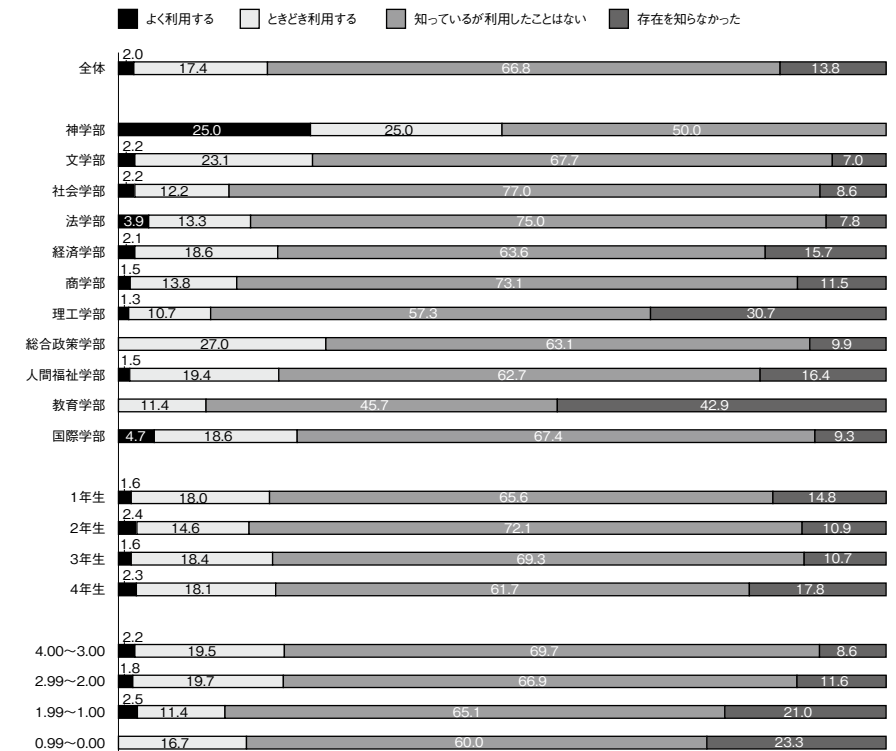


図4-5-4 「コーナーの資料」レポート・論文作成図書コーナー (Q19)

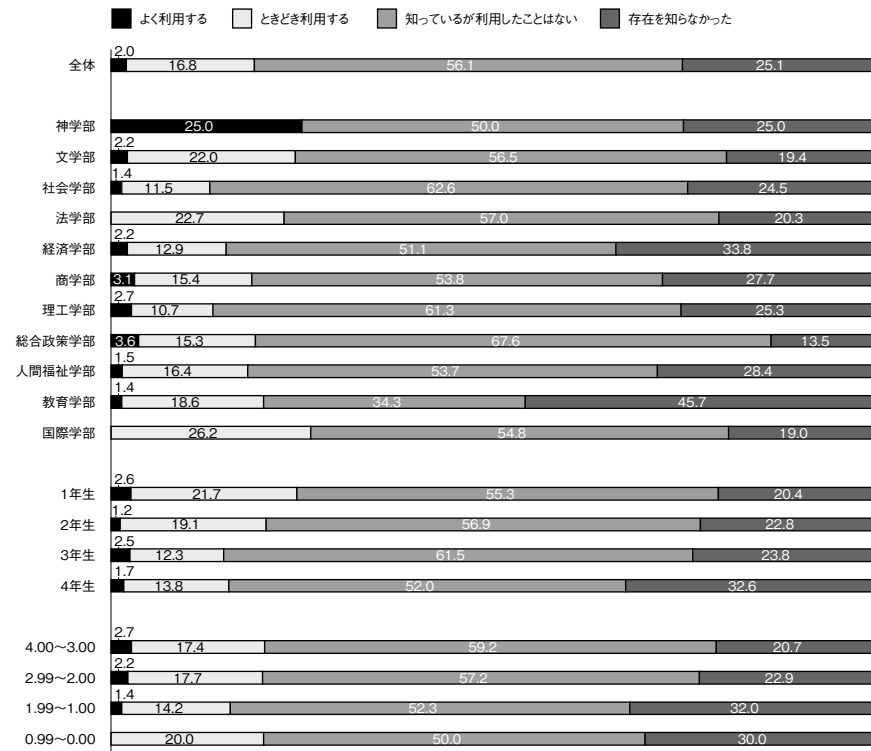


図4-5-5 「コーナーの資料」新聞書評コーナー (Q19)

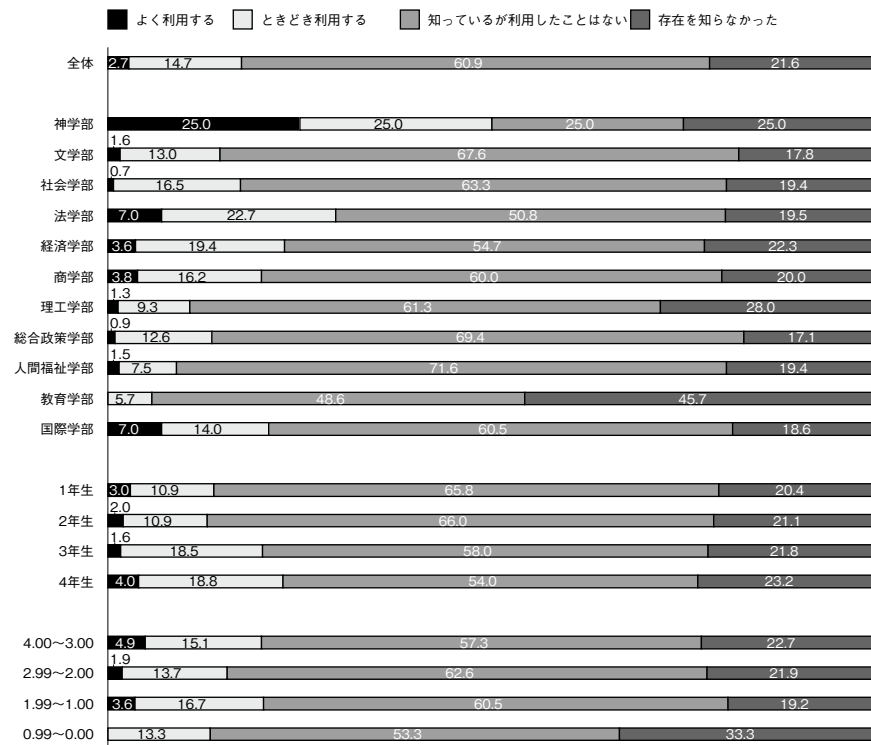


図4-5-6 「コーナーの資料」上ヶ原のラウンジ、神戸三田のブラウジング (Q19)

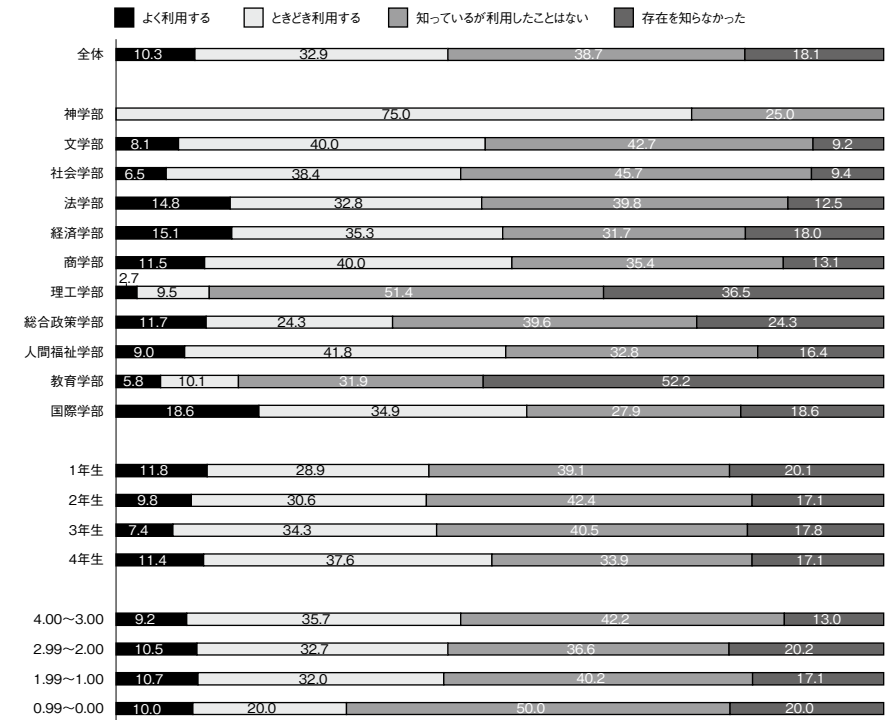


図4-5-7 「コーナーの資料」新書・文庫コーナー (Q19)

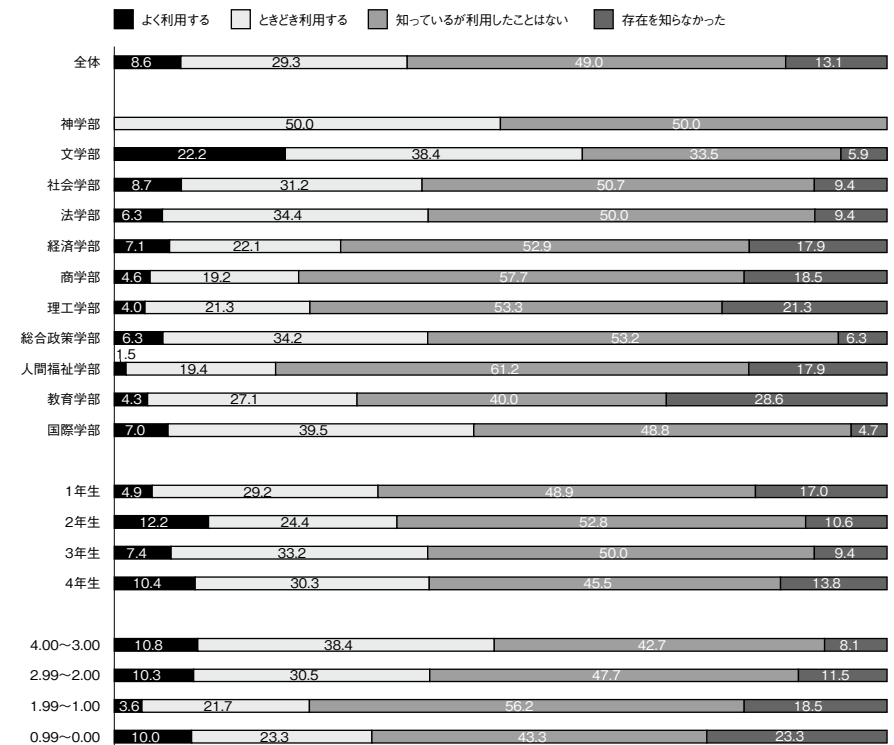


図4-5-8 「図書館サービス」学期中の日曜日の開館 (Q19)

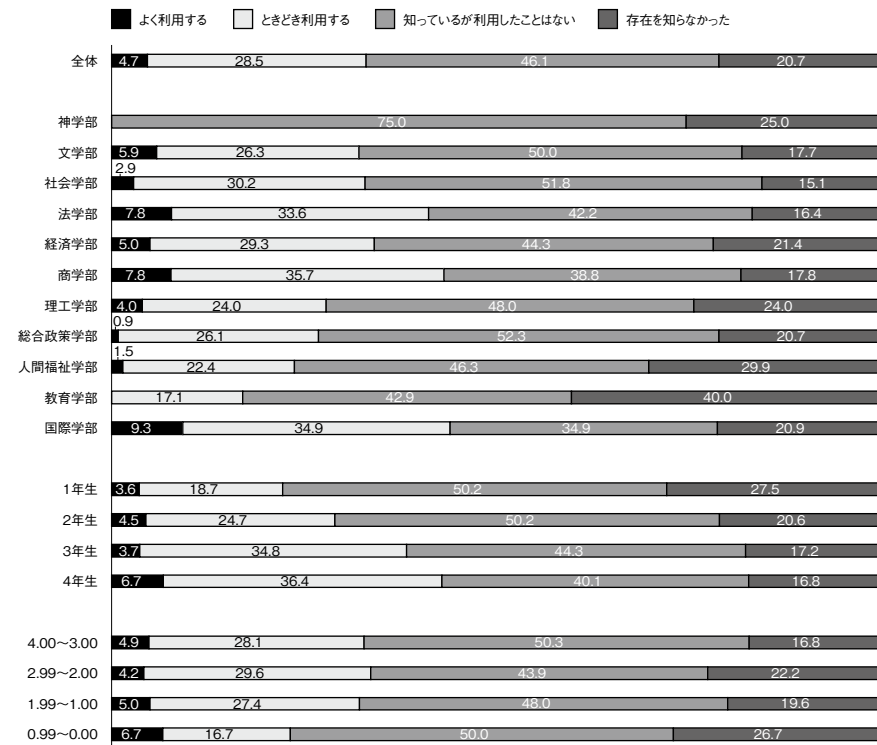


図4-5-9 「図書館サービス」レファレンスサービス (Q19)

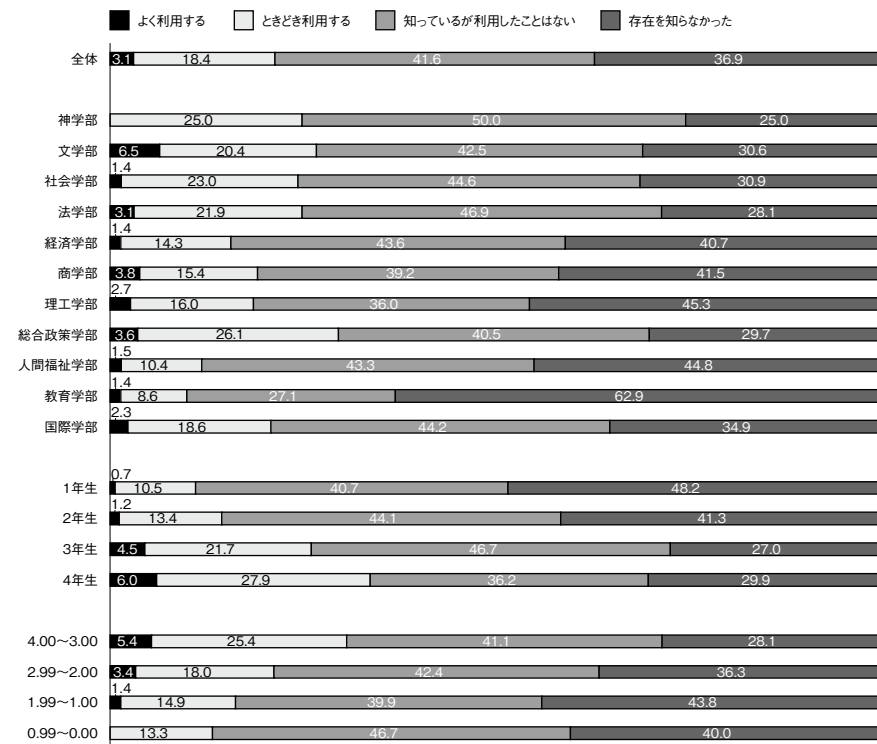


図4-5-10 「図書館サービス」他大学図書館での資料の閲覧 (相互利用・閲覧利用) (Q19)

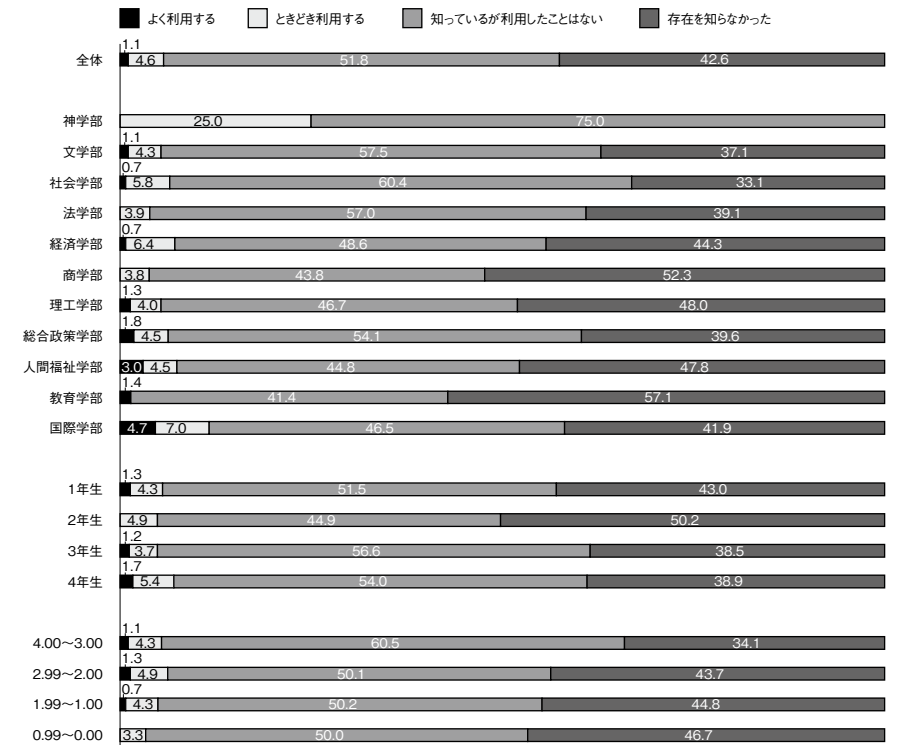


図4-5-11 「オンラインサービス」大学図書館ホームページ (Q19)

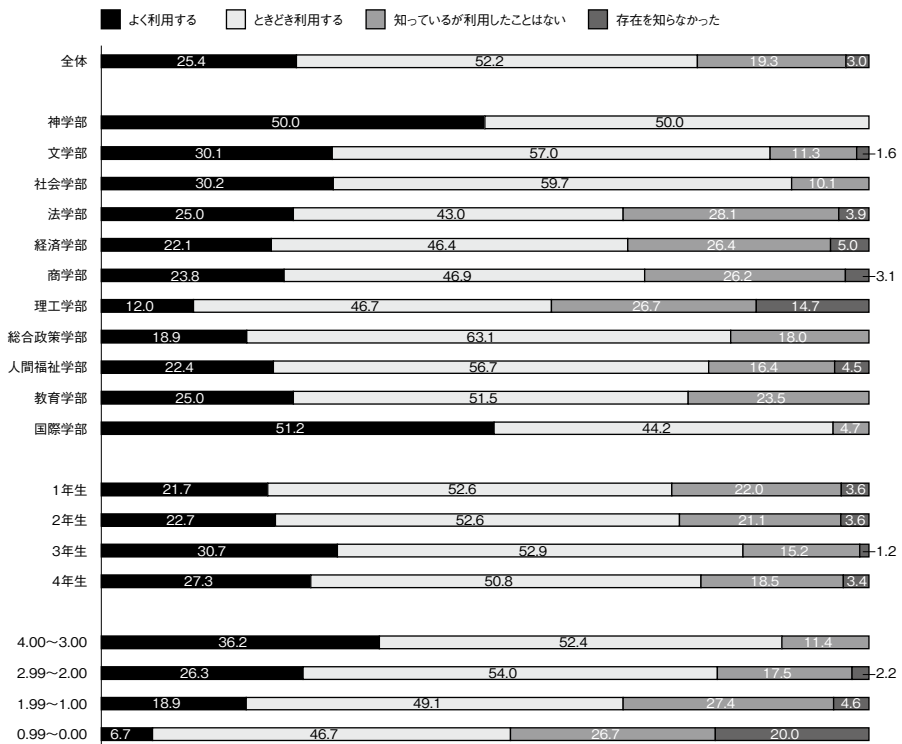


図4-5-12 「オンラインサービス」OPAC（関西学院大学図書館蔵書検索システム）（Q19）

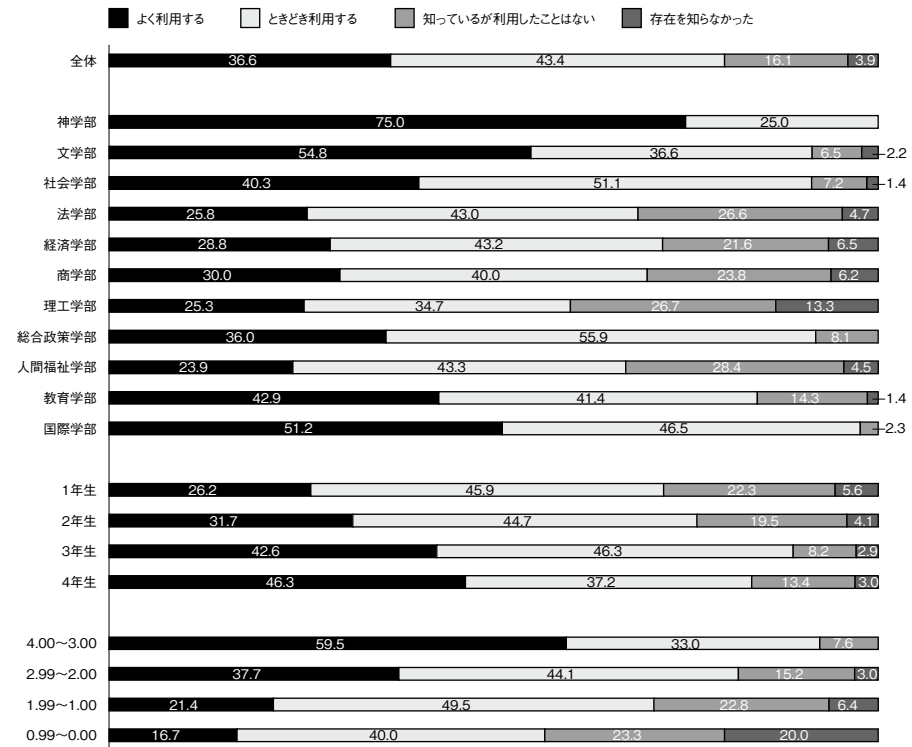


図4-5-13 「オンラインサービス」OPACでの貸出中の図書の予約申込（Q19）

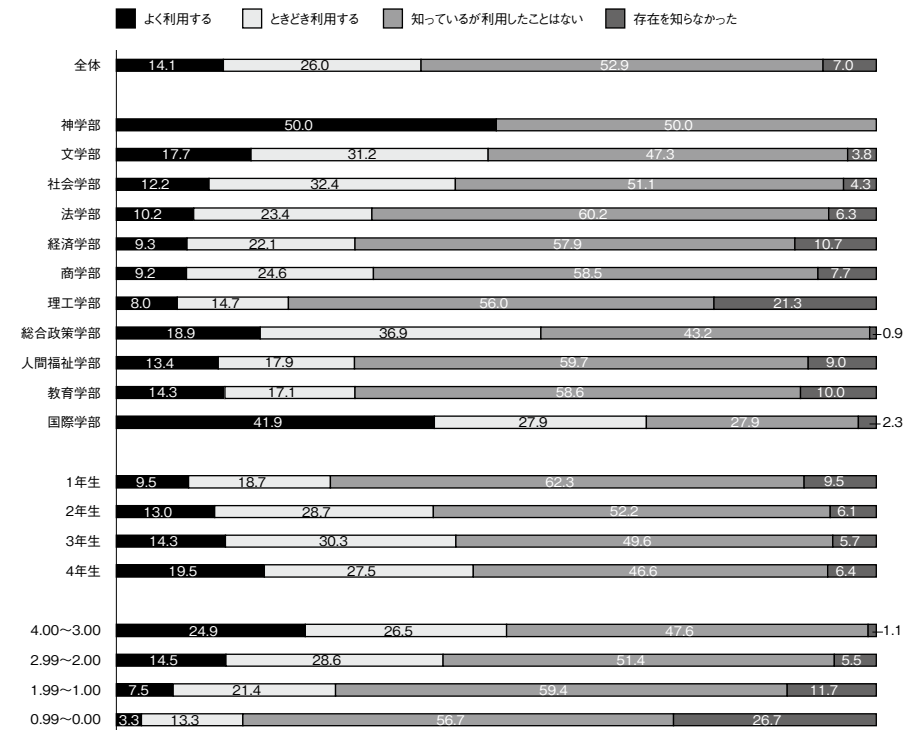


図4-5-14 「オンラインサービス」図書館が提供しているWebデータベース（CiNii、日経テレコン21など）（Q19）

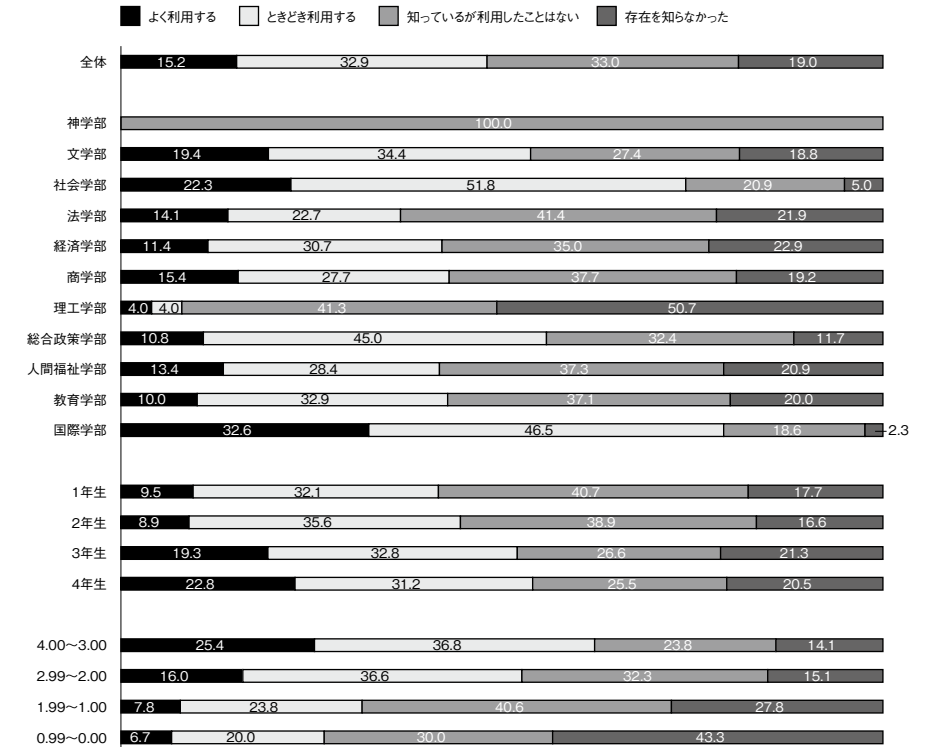


図4-5-15 「オンラインサービス」図書館が提供している電子ジャーナル（Q19）

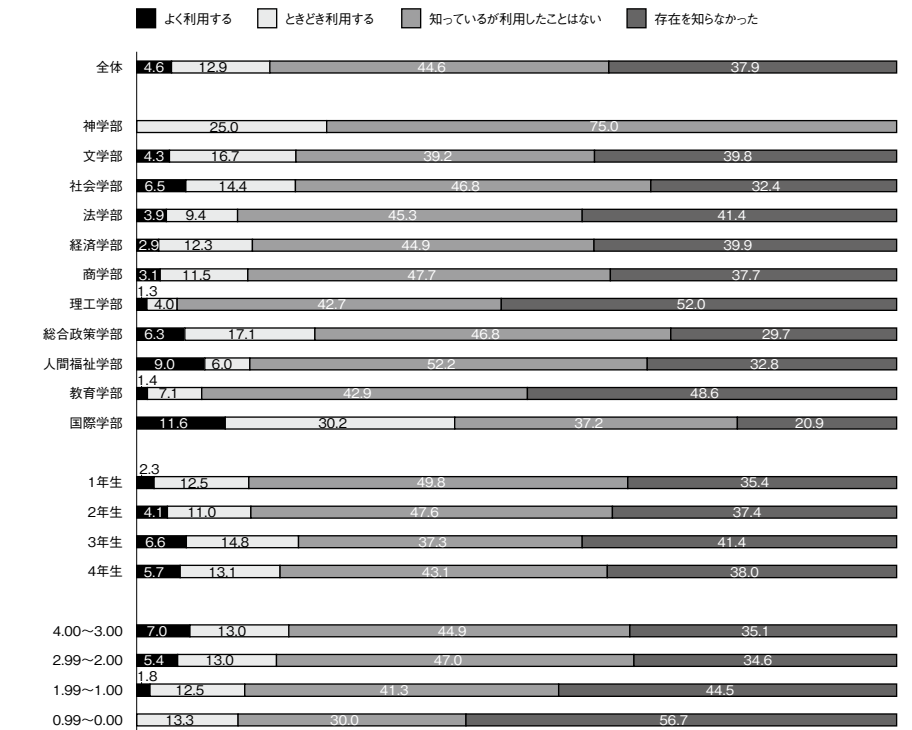
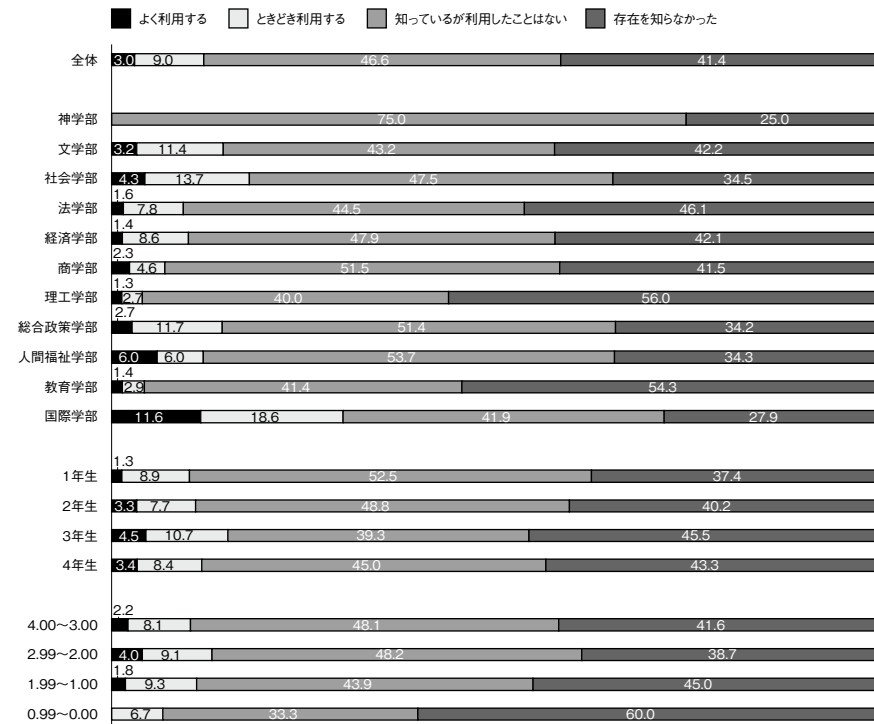


図4-5-16 「オンラインサービス」図書館が提供している電子ブック(Q19)



大学施設のまとめ

今回の調査を行った対象学部は、3つのキャンパスに跨っており、それぞれのキャンパスに通学する学生がキャンパスライフについて、どのように考えているのかを中心に実態調査を行った。加えて現在本学で問題となっている通学時の交通マナーの悪さ、騒音問題（特に夜間）、喫煙しない学生からの苦情や昼食問題などの改善施策につなげる基礎資料とすることとした。

学内の生活環境の快適さの調査では、教室、食堂、トイレに絞って実施した。教室については、全体で64.7%の学生が「満足」（とても快適+まあまあ快適）を示した。キャンパス間での大きな開きはなく学部間においては、国際学部の86.1%が高く、理工学部が48.0%と最も低く大きな開きが出た。

食堂については、教室と異なり「普通」が38.7%で一番高く、次が「不満足」（不快+あまり快適とは思わない）の33.0%、「満足」（とても快適+まあまあ快適）が一番低く28.4%となり、「不満足」が「満足」を上回る結果となった。学部別「不満足」で見ると、49.3%の教育学部が飛びぬけて高く、次の社会学部39.7%と約10ポイントの開きがあった。これはキャンパス間格差と認識することができ、解消すべき課題であろう。

トイレについては、全体では「満足」（とても快適+まあまあ快適）が55.2%で、「普通」（30.5%）、「不満足」（不快+あまり快適と思わない）14.3%となっている。学部別では、比較的新しい建物を使用している学部学生の「満足」が高く、人間福祉学部85.1%、国際学部83.7%となっている。「不満足」が高い学部は、法学部、教育学部（ともに29.5%）、商学部（26.5%）となっている。男女別では、女性が「不満足」で6ポイント弱、男性を上回った。学内でも新しい校舎と古い校舎のトイレでは快適さが異なっているので、少なくとも基準を学内の最も新しい校舎のトイレにおき、そして「不満足」（「不快」+「あまり快適と思えない」）の度合いを改善目標にするべきであろう。

通学時の交通マナーに直結する通学手段では、キャンパス別に分析する。NUCでは阪急甲東園駅利用学生が60.8%、続いて阪急仁川駅が31.5%となっている。NSCは阪急門戸厄神駅利用学生が93.0%、最寄り駅からの通学手段では、徒歩が71.2%（全体平均51.9%）と高くなっている。KSCではJR新三田駅利用学生が62.5%、JR三田駅が19.9%で、最寄り駅からの通学手段ではバスが66.7%となっている。また、KSCでは自動車通学が許可制で認められていることが、他のキャンパスとの大きな違いである。

このほか自転車または50cc以下のバイクで通っている学生についてもたずねたところ、全体では1,025人中218人（21.2%）でNUC 171人（21.8%）、KSC 32人（18.4%）、NSC 15人（22.7%）であった。このようにみると、交通マナーに関する苦情の地域別件数と比例する結果であった。また、これらの学生に更に、「最寄の駅付近のどこに置いていますか」という質問をしたところ、その中に、「不法駐輪をしている」と堂々と回答した学生が3.1%おり、大変驚かされた。このようなことが苦情件数の増加につながっていると考えられる。

次に、大学での昼食についての調査では、①昼食をどのようにとるか？（何を食べるか？）、②昼食を食べる場所（どこで食べるか？）を設問した。①「何を食べるか」の全学集計では「弁当や惣菜などを買って食べる」が37.2%でトップ、次に29.8%の「自宅から持ってきた弁当などを食

べる」の順で、食堂利用は28.9%で3番目となっており、食堂で作られるものを食べる学生が3分の1未満であった。大半が弁当に頼っている要因が、食堂の狭さや休憩時間のなさなど考えられるが、今年4月KSCで、来年はNUCでコモンズが完成し、運用が開始することによる影響を注視する必要がある。キャンパス別の食堂利用率は、KSC (60.1%)、NUC (22.6%)、NSC (18.5%) となっている。

これらの違いは上述の理由に加え、キャンパス周辺の環境が大きく影響していると思われる。NUCで特筆されるのは、G号館に近い学部学生の弁当や惣菜を買って食べる率が、人間福祉学部で44.6%、国際学部で52.6%、商学部が51.6%となっていることである。②の「食べる場所」では、全学的に最も多いのは「教室など学内の部屋」であった(52.0%)。50分の昼休みに余裕を持って昼食を済ませることができることが要因であろう。また男女別で見ると、食堂で食べる割合が男性49.5%とほぼ半数であるのに対して、女性の食堂利用の割合が24.2%で、教室など学内施設でとる割合が男性33.6%に対して女性は66.2%に達しており、良い環境とは言いがたい。このように教室など学内の部屋で昼食をとる学生が多く、このことから学生数が増加し、食堂が狭隘となっていることが明らかである。

また、自宅生よりも自宅外生の方が食堂利用率は高い(24.5%に対して39.1%)。逆に自宅外生が「自宅から持ってきた弁当などを食べる」はきわめて低く(9.8%)、自宅生が37.9%と高い。また自宅外生の「弁当や惣菜などを買って食べる」も、46.1%と高い。

分煙の方針をとっている喫煙についての調査では、全学生で見ると喫煙率は4.9%で、男女別にみた場合は男性8.9%、女性2.0%である。キャンパス別では大きな差はない。次に、自宅生の喫煙率は3.4%であるが、自宅外生の喫煙率は8.8%と2倍を超える。今後、他大学との比較や分煙の方針についても検討が必要であろう。

大学図書館では、教育・研究・学習をサポートする図書・資料の提供に加えて、この数年にわたり学生の教養や余暇の読書ニーズを満たすような資料を集めたコーナーの設置や充実を力を入れてきた。全体的な傾向として学年が上になるにつれて認知度も利用経験も上がるが、「レポート・論文作成図書コーナー」だけは新生が履修する基礎演習対象の文献探索講習会で積極的に紹介していることもあって、1年生が最も認知度も利用経験も高くなった。学部別では、どのコーナーにおいても教育学部生の認知度ならびに利用経験が他学部生と比べて低かった。「存在を知らなかった」と回答した割合において、最高値の教育学部と最低値の国際学部との間には20~33ポイントの差がついた。レファレンスカウンターで提供しているレファレンスサービス、学内外の相互利用、購入希望制度においては、認知度・利用経験ともに学年別では4年生が最も高く、GPAにも比例している。来館しなくても蔵書の検索や予約をしたり、論文や新聞記事を探したりできる各種オンラインサービスの利用経験も学年とGPAに比例して上昇している。教育学部の学生への図書館サービス内容の情宣は今後の課題である。

5. 大学生生活の充実度および評価

(1) 学生生活の充実度 (Q1)

Q1は、「あなたの今の学生生活は、全体としてどのくらい充実していると思いますか。」という設問であり、その分布は、全体、学部別、学年別、男女別、GPA別、入試形態別、住居形態別、団体参加状況別に図5-1-1のとおりである。

全体で見ると、「非常に充実している」は14.3% (前回比+1.1ポイント、以下同様)、「かなり充実している」が41.3% (+6.8) であり、合わせて肯定的回答は55.6% (+7.9) である。「まあまあ」と答えた者は、前々回(2008年) 37.4%、前回(2010年) 41.4%、今回37.3%である。「まあまあ」を消極的肯定と考えると、肯定的回答は92.9%であり、高い水準といえる。一方、否定的回答は、「あまり充実していない」6.1% (-1.2)、「全然充実していない」1.1% (-0.5) であり、両者を合わせて7.2% (-1.7) となっている。「非常に充実している」は、2006年、08年、10年の調査で、12.5%、13.3%、13.2%と全体として横ばい傾向にあったが、今回調査では14.3%と、わずかであるが増加した。「全然充実していない」は、2.0%、1.6%、1.6%、1.1%であり、こちらは横ばいもしくはやや減少の傾向である。

学部別に見ると、理工学部以外はすべてで肯定的回答が50%を超えている。前回調査との比較では、総合政策学部以外で肯定的回答が増加し、うち、法学部、人間福祉学部、国際学部では10ポイント以上の増加が見られる。「まあまあ」の消極的肯定を加えると、理工学部が83.4%、他は全て90%を超えており、国際学部では100%となる。一方、否定的回答が増加している学部もあり、理工学部(+7.8)、総合政策学部(+2.7)、人間福祉学部(+3.1)、教育学部(+4.9)となっている。前回調査では1年生のみが対象であった国際学部は、3年生まで学年が進行し、「非常に充実している」が前回調査より8.1ポイント増加の25.7%、「かなり充実している」と合わせた肯定的回答は71.4%であり、否定的回答はゼロである。理工学部では、肯定的回答が前回調査より8.7ポイント増加しているが、否定的回答も7.8ポイント増加している。

学年別に見ると、肯定的回答が1年生54.5%、2年生55.7%、3年生53.3%、4年生58.3%である。前回調査との比較では、いずれの学年でも充実感が増しているが、前回同様、3年生で充実感が落ち込む傾向にある。否定的回答の前回比較は、1年生+0.4ポイント、2年生増減なし、3年生-0.2ポイント、4年生-7.2ポイントである。

男女別に見ると、肯定的回答は男性51.5% (+8.4)、女性58.5% (+7.4) であり、前回同様、女性の方がより充実感を覚えている傾向にある。否定的回答の割合も、男性10.7% (-1.8)、女性4.7% (-1.5) と、女性は男性の約半分である。

入試形態別に見ると、「AO入学試験」入学者の「非常に充実している」割合が23.3%と突出しており、「かなり充実している」と合わせた肯定的回答では65.0%とな

Q1. あなたの今の学生生活は、全体としてどのくらい充実していると思いますか。1から5までの数字を選んで○印を付けてください。

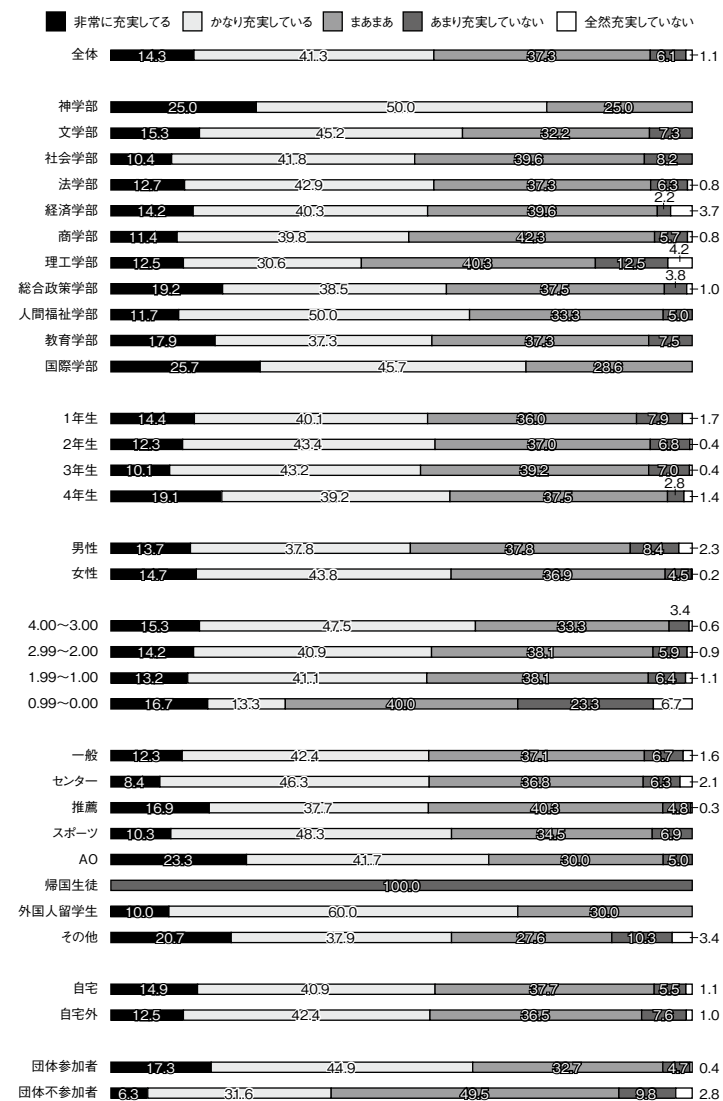
- 1 全然充実していない
- 2 あまり充実していない
- 3 まあまあ
- 4 かなり充実している
- 5 非常に充実している

る。肯定的回答では、「一般入学試験」54.7%、「センター利用入学試験」54.7%、「推薦入学試験」54.6%に差は見られないが、否定的回答では、8.3%、8.4%、5.1%と、わずかながら「推薦入学試験」が低い。

住居形態別では、自宅通学生、自宅外通学生の間に顕著な差は見られないが、僅かながら自宅生の方がより充実感を覚えているというのは、これまでの調査結果と同様である。

団体への参加状況では、肯定的回答は団体参加者62.2% (+8.8)、不参加者37.9% (+4.6) であり、これまでの調査同様、団体参加者の方が大学生活に対してより充実感を覚えるという結果になっている。

図5-1-1 大学生生活の充実度 (Q1)



(2) 周囲に関学への入学を勧めるか (Q12)

Q12では、「あなたは兄弟姉妹や親しい友人・後輩に関西学院大学への受験や入学をどのくらい勧めますか。」という質問に対して、0~5の6段階から選択してもらった。結果は図5-2-1に示す通りである。0~2は否定的回答「勧めない」、3は中立的回答「普通」、4、5は肯定的回答「勧める」という判断基準でみると、全体的には0~2の「勧めない」は10.4%を占め、逆に4、5の「勧める」は68.4%であった。

所属学部別にみたところ、神学部は、回答者数が4名であるので、これを対象から除き、「勧める」の比率の高い順に並べると、国際学部88.1%、社会学部75.8%、総合政策学部75.6%、人間福祉学部74.6%、教育学部73.2%、商学部70.3%、文学部68.6%以上が全体平均68.4%より高く、続いて経済学部65.5%、法学部61.2%、理工学部40.0%の順となっている。「勧めない」の比率の高い順は、理工学部21.3%、法学部14.0%、経済学部12.3%、総合政策学部11.7%で全体平均10.4%より高く、続いて人間福祉学部、文学部、商学部、社会学部、教育学部、国際学部の順となっている。

学年別にみた場合、「勧める」では、4年生が74.3%、1年生68.3%、2年生65.6%、3年生64.2%の順となっている。「勧めない」では、1年生13.0%、2年生11.6%、4年生9.1%、3年生7.8%の順となっている。4年生の「勧めたい」が最も高い。

男女別にみた場合、「勧める」では、男性は64.5%、女性は71.1%で、「勧めない」では、男性が12.2%、女性が9.3%となっている。女性の「勧めたい」男性より高い。

GPA別でみた場合、「勧める」では、GPA4.00~3.00の層が70.1%と最も高く、「勧めない」では、GPA0.99~0.00の層が20.1%と最も高い。なお、「普通」でもGPA0.99~0.00の層が30.0%で最も高い。

入試形態別にみた場合、「勧める」では、AO入学試験81.3%、外国人留学生入試80.0%、スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験75.0%であるが、回答数がそれぞれ64人、10人、32人となっている点で他と比較できるものではない。これらを除外すれば、推薦入学試験71.9%、一般入学試験で64.9%、センター利用入学試験63.1%となっている。

なお、その他、帰国生徒入学試験は回答者数が少ないため参考としない。社会人入試も同様である。

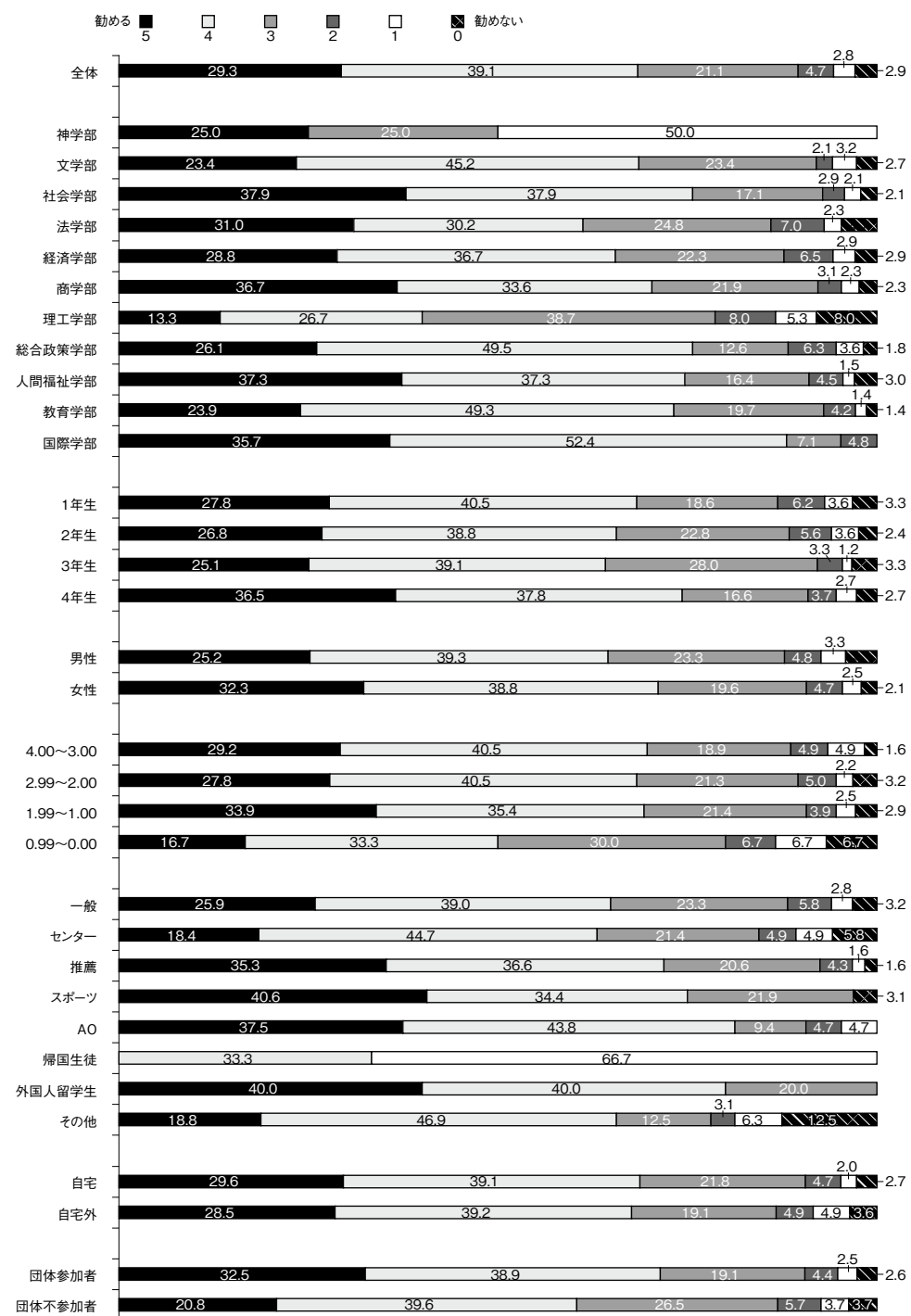
住居形態別に見ると、「勧める」では、自宅68.7%、自宅外67.7%、「勧めない」では自宅9.4%、自宅外13.4%であった。「勧める」では自宅、自宅外の大きな差異はみられない。

団体への参加状況でみた場合、「勧める」では、団体参加者71.4%、団体不参加者60.4%、「勧めない」では団体参加者9.5%、団体不参加者13.1%であった。「勧める」では団体参加者は全体平均より高く、団体不参加者は全体平均より低く、「勧めない」ではその逆であった。

Q12. あなたは兄弟姉妹や親しい友人・後輩に関西学院大学への受験や入学をどのくらい勧めますか。0から5までの数字を選んで○印を付けてください。

勧める 5……………4……………3……………2……………1……………0 勧めない

図5-2-1 本学への入学を勧めるか (Q12)



(3) 関学での生活が役立つか (Q15)

Q15は、「関西学院大学で人生の一時期を過ごすことは、あなたの将来にとってどのくらい役立つと思いますか。」という設問であり、その分布は、全体、学部別、学年別、男女別、GPA別、入試形態別、住居形態別、団体参加状況別に図5-3-1のとおりである。

全体で見ると、「大いに役立つと思う」28.0% (前回比-4.1ポイント、以下同様)、「かなり役立つと思う」39.3% (+3.7) であり、合わせて肯定的回答は67.3% (-0.4) である。一方、「たいして役立つまいだろう」2.5% (-0.1)、「ほとんど役立つまいだろう」0.7% (-0.7) の両者を合わせた否定的回答は3.2% (-0.8) となっている。肯定的回答67.3%と「いくらか役立つと思う」29.5% (+1.9) の消極的肯定を加えると96.8%となり、これまでの調査と同じ高い水準を維持しているといえる。

学部別に見ると、「大いに役立つ」という回答率が高い順に、国際学部40.5% (-0.7)、人間福祉学部34.3% (+10.2)、経済学部32.4% (-2.5)、教育学部31.0% (+0.2) と続く。

肯定的回答で見ると、国際学部85.7% (+9.2)、総合政策学部74.7% (+2.0)、教育学部74.7% (-2.3)、人間福祉学部74.6% (-3.2) となり、近年設置された学部での評価が高い。理工学部は、前回調査との比較では、「かなり役立つ」33.3% (+6.6)、「いくらか役立つ」48.0% (+6.9%) が増加したものの、「大いに役立つ」13.3% (-15.6) が大幅に減少し、肯定的回答率が低くなった。

学年別に見ると、肯定的回答が1年生65.4% (+2.1)、2年生66.4% (+1.5)、3年生62.1% (-6.1)、4年生74.6% (-2.1) である。これまでの調査では、学年が上がるにつれて有用性を意識している傾向が現れていたが、今回は、充実感と同様に、3年生で落ち込んでいる。否定的回答の前回比較は、1年生+0.7ポイント、2年生-0.1ポイント、3年生-1.8ポイント、4年生-1.8ポイントである。

男女別に見ると、肯定的回答は男性67.6% (-1.1)、女性67.2% (+0.3) であり、これまでと同様、あまり差は見られない。否定的回答は、男性4.8% (-0.8)、女性2.1% (-0.7) である。

入試形態別に見ると、「スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)」入学者の「大いに役立つ」割合が53.1%と突出しており、「かなり役立つ」と合わせた肯定的回答では84.4%となる。肯定的回答では、「AO入学試験」82.8%、「推薦入学試験」71.1%と、推薦入試系で評価が高い。

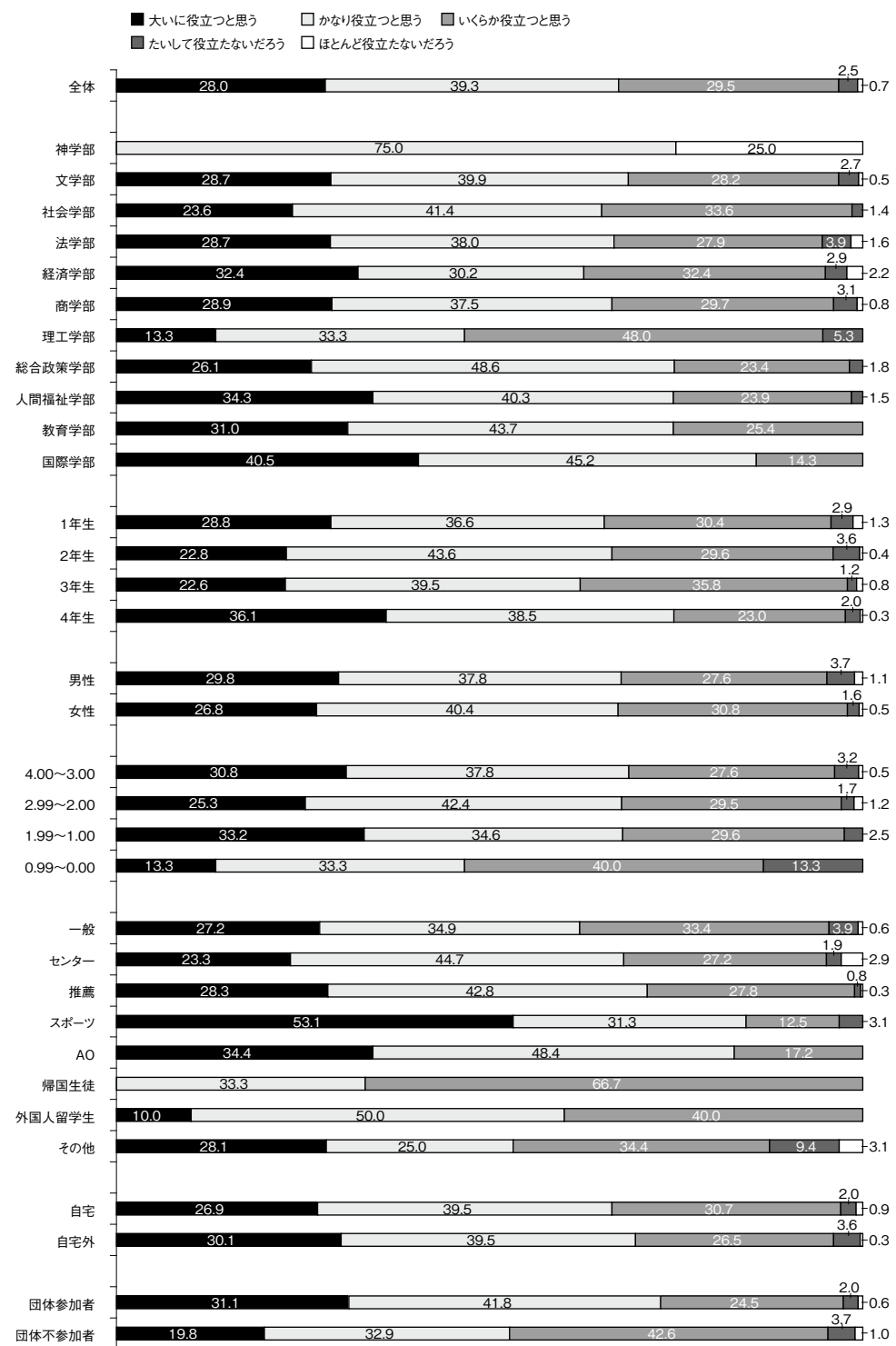
住居形態別では、自宅通学生、自宅外通学生の間に顕著な差が見られないのは、これまでの調査結果と同様である。

団体への参加状況では、肯定的回答は団体参加者72.9% (+2.3)、不参加者52.7% (-7.9) であり、団体参加者の方が高い評価を与えるという従来の傾向が、今回も観測されている。

Q15. 関西学院大学で人生の一時期を過ごすことは、あなたの将来にとってどのくらい役立つと思いますか。1から5までの数字を選んで○印を付けてください。

- 1 ほとんど役立つまいだろう
- 2 たいして役立つまいだろう
- 3 いくらか役立つと思う
- 4 かなり役立つと思う
- 5 大いに役立つと思う

図5-3-1 将来に関学での生活が役立つと思うか (Q15)



大学生生活の充実度および評価のまとめ

「大学生生活の充実度・評価」の程度を認識するために設定した設問は、Q1「あなたの今の学生生活は、全体としてどのくらい充実していると思いますか」、Q12「あなたは兄弟姉妹や親しい友人・後輩に関西学院大学への受験や入学をどのくらい勧めますか」、Q15「関西学院大学で人生の一時期を過ごすことは、あなたの将来にとってどのくらい役立つと思いますか」である。各項目についての全体的な傾向を要約すると、以下のとおりである。

全体でみると、学生生活が「非常に充実している」と回答した学生は14.3%、「かなり充実している」(41.3%)と合わせた肯定的回答は55.6% (前年比+7.9ポイント) である。本学で過ごすことが、自分の将来にとって「大いに役立つ」と感じている学生は28.0%で、「かなり役立つと思う」(39.3%)と合わせた肯定的回答は67.3% (前年比-0.4ポイント) である。兄弟、友人、後輩に入学を勧めるかという問いには、29.3%が「勧める(度数5)」、39.1%が「度数4」であり、肯定的回答は68.4%である。

これらの設問では、何をもって充実しているのか、役立つと感じているのか、何を勧めたいのか、その要因を問うていないので、授業や留学などの学びに満足しているのか、クラブ・サークル活動が充実しているのか、ボランティア活動など学外活動が役立つと考えているのか、友人関係が充実しているのか判断できない。

ここでは、学部別集計結果が、各学部の特徴あるカリキュラムに対する評価を反映しているのではないかと仮定して、学部別に傾向をみる。

神学部は、回答数が4件と少ないので学部の傾向を表しているとはいえないが、学生生活はかなり充実していると感じ、将来にとっても役立つと考えるものの、入学を勧める度合いは低い。文学部は、60.5%が充実感を覚え、68.6%が将来に役立つと考え、入学についても68.6%が肯定的回答であった。社会学部は、「充実感」については52.2%が、「役立ち感」は65.0%が肯定的回答で、全体に比べやや低い評価になっているものの、入学を勧める度合いは75.8%と高くなる。法学部は、「充実感」は55.6%、「役立ち感」は66.7%が肯定的回答であり、入学については61.2%が勧める、と平均的である。経済学部では、「充実感」は54.5%、「役立ち感」は62.6%が肯定的回答であり、入学については65.5%が勧めると、全体としてやや低めの評価となった。商学部は、「充実感」に対する肯定的回答は51.2%でやや低く、「役立ち感」は66.4%であるが、70.3%が入学を勧めると回答している。理工学部は、「充実感」は43.1%が、「役立ち感」は46.6%が肯定的回答であり、他に比べてやや低い。入学を勧めるかという問いについても肯定的回答は40.0%であり、否定的回答が21.3%と高くなる。同じ神戸三田キャンパスに立地する総合政策学部では、「充実感」に対する肯定的回答は57.7%と平均的であるが、「役立ち感」では74.7%が肯定的評価をし、75.6%が他に勧めるという高い評価になっている。近年設置された学部では、人間福祉学部が、61.7%が充実感を覚え、74.6%が将来に役立つと考え、74.6%が他にも勧めると答え、いずれの設問でも高い評価となっている。教育学部では、「充実感」に対する肯定的回答は55.2%と平均的であるが、「役立ち感」では74.7%と高くなり、入学を勧めるものも73.2%と高くなる。国際学部は、71.4%が充実感を覚え、85.7%が将来に役立つと考え、88.1%が入学を勧めると回答している。いずれの設問においても、突出して高評価となっている。また、いずれの設問において

も、否定的回答がゼロというのは特筆すべき結果であろう。

次に、学生生活の充実度・評価は、正課だけでなく、クラブ・サークル活動、ボランティア活動など正課外活動に対する評価、友人関係などの評価も反映していると考え、入試形態別、団体参加状況別から傾向をみる。

一般入学試験入学者は、54.7%が学生生活を充実していると感じ、62.1%が将来にとって役だつと考え、他にも勧めると64.9%が回答している。センター利用入試入学者では、「充実感」は54.7%と一般入試と同等であるが、「役立ち感」では68.0%が肯定的とやや高くなる。他に勧めるかという問いには63.1%が肯定的回答であった。推薦入学試験入学者でみると、「充実感」は54.6%と、一般入試、センター利用入試と変わらないが、「役立ち感」は71.1%、「他に勧める」は71.9%と高くなる。ここでは、一般入学試験、センター利用入試、推薦入学試験の入学者が、どの程度、正課外活動に参加しているかという情報がないために、これらの入試入学者の充実度と正課外活動との関係を図ることはできない。一方、スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験（スポーツ活動）入学者は、入学後もスポーツ活動を継続する者がほとんどである。この層では、「充実感」は58.6%とやや高くなり、「役立ち感」が84.4%、「他に勧める」は75.0%と高い回答率となった。将来「大いに役立つ」と捉えている者が53.1%に上るのは特筆すべきである。スポーツ活動を続けることで、スポーツの指導者を目指す、就職に有利、一生の友人ができる、などといった期待があるのではないかと考えられる。AO入学試験入学者では、65.0%が学生生活を充実していると感じ、82.8%が将来に役立つと考え、81.3%が他に推薦すると答え、いずれの設問でも高い評価となった。特に、充実度では「非常に充実している」割合が23.3%と突出しており、他の設問での評価と併せても、アドミッションポリシーに沿った入学者を迎えられているのではないかと推測できる。この層は、入学後は必ずしも正課外活動に参加するとはいえないものの、スポーツ・文化活動やボランティア活動、言語能力などを評価されて入学する者が多く、また本学への入学意思が強いという条件もあるため、モチベーションが高いと考えられる。帰国生徒入学試験、外国人留学試験入試は回答数が少ないために、分析の対象外とするが、外国人留学生入試入学者では否定的回答はなく、帰国生徒入試入学者では、他に勧めないという回答が最も多かったことを付記しておく。

団体への参加状況から傾向を見ると、団体不参加者は、充実度に関する肯定的回答は37.9%、役立ち感は52.7%、他に勧めるのは60.4%が肯定的回答である。一方、団体参加者は62.2%が充実感を覚え、72.9%が将来役立つと考えており、71.4%が他へも勧めるとい結果になっている。

大学の充実度・評価は、これまでの調査同様、団体参加者の方が大学生活により充実感を覚え、より高い評価を与えるという傾向が、今回も観測されている。

6. 大学環境の認知

(1) 大学環境調査について

カレッジ・コミュニティ調査の第Ⅱ部は、「大学環境調査」である。大学環境は建物、教職員、学生、カリキュラム、授業、手続き、学生の関心、課外活動など様々な物事や活動、また条件が複雑に絡み合って成り立っている。この大学環境調査は、それらの諸要素を、個々の学生がどのように受け止めているかを見ようとして考案されたものである。

この調査では、回答者自身の価値観などを直接的に聞くのではなく、周りの学生は一般的にどのような関わり方をしているのかなどを始めとして、学生が本学をどの様に感じ、どう関わっているのか、また彼らが本学をどう受け止めているのかを、全体的、総合的に把握しようとするものである。

第13回調査までは、大学という環境を表現したそれぞれの文章について、回答者がそうだ、あるいはそれに近いと思ったら「はい」、そうでないと思ったら「いいえ」の2件法で回答するようになっていたが第14回調査（2006）から、これを「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらかというと思わない」「そう思わない」の4件法で答えるように変更した。しかし、継続的な比較のために得点集計の際は「そう思う」「どちらかというと思う」を従来の「はい」へ、「そう思わない」「どちらかというと思わない」を「いいえ」として集計した。

本来、この「大学環境調査」は、カリフォルニア大学のペイス教授（C. Robert Pace）が、1963年に考案した College and University Environment Scales (CUES) をもとに、立教大学学生相談研究所および学生部が日本語に翻訳したものである。すでに、これまでの報告書においても述べたとおり、この大学環境調査は、実用性（Practicality）、学究性（Scholarship）、共同性（Community）、妥当性（Propriety）、意識性（Awareness）という5つの領域によって、その大学の特徴をとらえることができるようになっている。

A. 実用性を問う20項目（1～10、31～40）は、大学の実際の、機能的側面を見るもので、コミュニケーション、学生の地位、教育体制、実用的利点等に関する設問によって成り立っている。

B. 学究性を問う20項目（11～20、41～50）は、学問的意欲、学問への関心、教育・研究の実態、知的関心、あるいは思想的関心等に関連する設問が主になっている。

C. 共同性を問う20項目（21～30、51～60）は、共同意識に関連した人間関係、あるいは親睦、グループ意識、帰属感などを探る設問が主になっている。

D. 妥当性を問う項目は、大学らしいと思われること、例えば、個人並びに団体生活のルール、社会や他人への配慮に関する関心等を探る設問によって成り立っている。

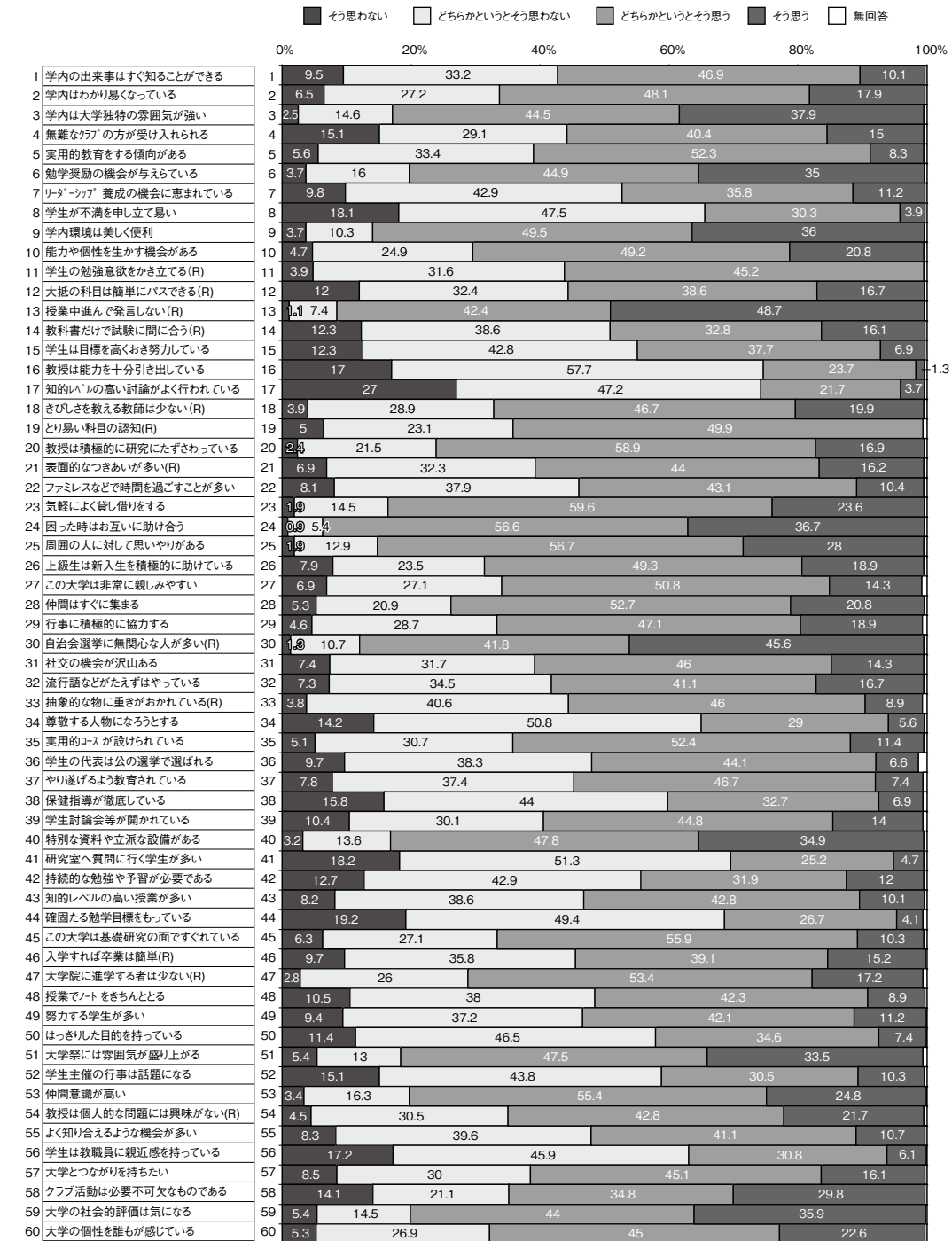
E. 意識性を問う項目は、自己意味の探究、あるいは政治的関心、創造性・芸術的関心等に関連する設問によって成り立っている。

本学の行っているカレッジ・コミュニティ調査では、1976年に行われた第1回調査から継続して行われている。しかし、第1回（1976）・第2回（1979）の調査では5領域、100項目が採用されたが、今回を含めた第3回（1982）以降の調査では、「A. 実用性」「B. 学究性」「C. 共同性」の3領域、60項目についてのみ調査が行われている。

集計結果は、

1. 各項目の「そう思わない」「どちらかというと思わない」「どちらかというと思う」「そう思う」の人数をパーセントで示したものが図6-1-1である。
2. 各領域を20項目20点満点とした場合の領域別平均得点(図6-1-1の項目の後ろに(R)で示されている項目は否定回答が1点)の形で表示されている。

図6-1-1 項目別回答比率



(2) 全体的な所見

さて、本学のこれまで(1979~2012年度)の調査結果を、領域得点で示したのが表6-1である。またこれらをグラフ化したものが図6-2-1である。今回の調査結果で、領域得点を高い順に見ると、共同性12.4(+0.5)、実用性11.9(+0.6)、学究性8.2(+0.4)となっており、第1回調査からこの順番は変わっていない。「学究性」は、14~16回調査でやや横ばい傾向であったのが今回は、「実用性」、「共同性」と共に上昇している。実用性、共同性は1995年度の第9回調査で大きく落ち込み以後継続して増加してきておりこの2領域は調査開始以来、一番高い得点となった。一方調査開始の1976年から第9回調査の1995年まで横ばいだった「学究性」は1998年の第10回調査以降上昇しやや横ばいからまた増加している。

次に、これら3領域の得点を算出する基礎として用いられた、60の質問項目に対する回答を個別に検討し、特に目につく事柄を以下に列記する事にする。(図6-1-1)

まず、肯定的(内容的に好ましい方向)な回答を見ると、80%以上の回答を得たのは、「実用性」3項目と「共同性」の5項目で、前回と比較すると「実用性」「共同性」共に1項目ずつ増えて計8項目(カッコ内は前回との差)となった。

- 「9. 学内環境は、大学にふさわしく美しく便利に整っている」…「はい」85.5%(-0.1) [実用性]
- 「40. この大学には、特別な資料や立派な設備がある」…「はい」82.7%(+1.0) [実用性]
- 「23. 学生は、気軽によく貸し借りをする」…「はい」83.2%(-0.6) [共同性]
- 「24. 学生は、困った時はお互いに助け合う」…「はい」93.3%(+1.0) [共同性]
- 「25. 多くの人は、自分の周囲の人に対して思いやりがある」…「はい」84.7%(+2.4) [共同性]
- 「51. 大学祭には、学内の雰囲気が盛りあがる」…「はい」81.0%(-1.2) [共同性]

新しく加わった項目は

- 「3. 学内は、この大学独特の雰囲気が強い」…「はい」82.4%(+3.4) [実用性]
- 「53. 学内では、仲間意識が高い」…「はい」80.2%(+5.6) [共同性]

であった。

次に、否定的な反応について見ると、まず、80%以上の回答を集めたものは、

- 「13. 学生は、授業中指名されるまではすすんで発言しない」…「はい」91.1%(+0.9) [学究性]
- 「30. 自治会選挙に無関心な人が多い」…「はい」87.4%(-1.4) [共同性]

と学究性1項目、共同性1項目である、これは前回と変わっていない。

この3つの領域の中で「学究性」の項目得点は、他の2領域の得点に比べるとまだまだ低く、また項目ごとに見ても「16. 教授は、学生の能力を十分ひき出している。(いいえ; 74.7%(-4.3))」「17. 学生の間では、真剣な知的レベルの高い討議がよく行われている。(いいえ; 74.2%(-3.1))」「41. 教師の研究室をたずねて、議論をしたり質問したりする学生が多い。(いいえ; 69.5(-5.7))」となっている。これらの項目については、前回「大学全体あるいは各教職員の働きかけで改善できる部分を見いだしてほしい。」と提言したが、3項目とも否定的な回答が減っている。

以上のような回答結果を羅列的に並べた限りは、これまで指摘されてきたような「美しく整った

環境の中で(実用性)、仲の良いグループで楽しい人間関係を育て(共同性)、明確な目的意識を持ち厳しい努力をする(学究性)よりも、学祭などで盛り上がり大学生活を楽しむ(共同性)」という従来型の大学生像がより強く反映されていると見て取れる。

(3) 属性別に見た特徴

学部別、学年別、性別、住居別、団体参加別、入試タイプ別に見た各領域得点は、表6-2に示されている。入試タイプについては今回から採用された新しい属性項目である。ここでは、F5の選択肢の「5. AO入学試験」「6. 帰国生徒入学試験」「7. 外国人留学生入学試験」「8. 社会人入学試験」を「9. その他」とまとめて、「1. 一般入学試験」「2. センター利用入学試験」「3. 推薦入学試験」「4. スポーツ推薦」「5. その他」の5分類とした。それぞれの領域得点ごとに属性を要因とした一元配置の分散分析を行った。主効果が得られた場合、以降の比較には有意水準を0.5%としてTukeyのt検定を行った。

学部別

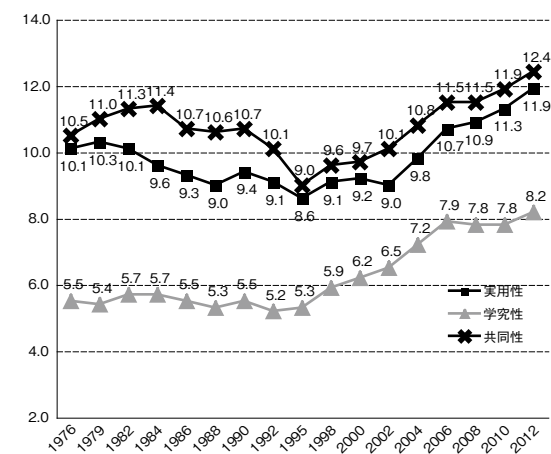
学部ごとのそれぞれの領域得点を図6-3-1に示す。まず全体的に見ると、前回の調査年度に開設された国際学部は、「共同性(全体平均:11.9、学部平均:13.3(-1.1))」「学究性(全体平均:8.2、学部平均:10.2(-21))」「実用性(全体平均12.4、学部平均13.7(-1.0))」と全体の3領域平均が上がっている一方で、3領域ともやや平均を下げているが、それでも他の学部に比べて3領域とも一番高い得点を示している。また3つの領域のすべてで学部の主効果が強く見られた(p<.001)。

領域ごとに見ると、「実用性」では2番目に得点が高いのは人間福祉学部の13.1(+1.2)であり、先に述べた国際学部以外は0.2~1.3ポイント得点を上げている。全体平均から見ると社会学部の11.6(+0.5)と経済学部の11.4(+0.2)がやや低く、理工学部の9.9(+0.2)は、目立って低い。この結果は前回調査と同じ傾向である。下位検定の結果では理工学部の、2番目に領域得点の低い経済とは有意な差は見られないが、それ以外の8学部より得点があり低くという結果になった。

表6-1 領域別得点表

回	調査年度	A. 実用性 (Practicality)		B. 学究性 (Scholarship)		B. 共同性 (Community)	
		平均	S.D	平均	S.D	平均	S.D
1	1976	10.1	3.05	5.5	3.01	10.5	3.22
2	1979	10.3	3.26	5.4	3.17	11.0	3.36
3	1982	10.1	3.20	5.7	2.90	11.3	3.32
4	1984	9.6	3.30	5.7	3.07	11.4	3.46
5	1986	9.3	3.33	5.5	3.08	10.7	3.43
6	1988	9.0	3.48	5.3	3.07	10.6	3.56
7	1990	9.4	3.22	5.5	3.05	10.7	3.48
8	1992	9.1	3.28	5.2	2.98	10.1	3.40
9	1995	8.6	3.39	5.3	3.32	9.0	3.48
10	1998	9.1	3.24	5.9	3.72	9.6	3.67
11	2000	9.2	3.40	6.2	3.69	9.7	3.57
12	2002	9.0	3.40	6.5	3.82	10.1	3.69
13	2004	9.8	3.51	7.2	3.92	10.8	3.70
14	2006	10.7	3.68	7.9	4.13	11.5	3.78
15	2008	10.9	3.69	7.8	4.15	11.5	3.63
16	2010	11.3	3.85	7.8	4.30	11.9	3.95
17	2012	11.9	3.85	8.2	4.32	12.4	3.74

図6-2-1 領域得点平均の推移



次に、「学究性」では前回2番目に得点の高かった理工学部は、全体平均が増えたにもかかわらず1.1ポイント得点を落として、文学部に次ぐ5番目の学部となった。経済学部も0.1ポイント平均を下げており、他の学部が0.1~0.8ポイント増である事を考慮すると点差が開く結果となった。新興の3学部を除いた学究性の順位は、文学部と理工学部が入れ替わった以外はほぼ従来通りの結果である。この領域における下位検定の結果は、得点の上位6つの学部、国際学部、教育学部、人間福祉学部、文学部、理工学部、総合政策学部の間に有意な差は見られない。また下位4学部、社会学部、経済学部、商学部、法学部間には差は見られない。一番平均の高い国際学部は、下位4学部と有意な差があり、それ以外の上位5学部は一番平均の低い2学部(社会学部・経済学部)と有意な差が見られた。

「共同性」では人間福祉学部と国際学部の13.7(+1.4、-1.0)が一番得点が高く、理工学部の10.4(-0.3)が目立って低い。共同性における高低のパターンは、ほぼ実用性と同じである。学部ごとに比較しても理工学部だけが他の学部より有意に平均が小さい。

これを領域ごとに見てみると、「実用性」と「共同性」では理工学部を除くと学部間に差はほとんどなく、「学究性」では学部によるばらつきが他の2領域と比べると大きい。「実用性」の、「2. 学内は、標識や方向案内図等によってわかり易くなっている」「3. 学内は、この大学独特の雰囲気が強い」や、「共同性」の「29. 大学の行事に、多くの学生は積極的に協力する」「53. 学内では、仲間意識が高い」というような質問項目では、これらは大学全体に関する評価であり、学部ごとに受け取り方に違いは少ないと思われる。また、学部の順位は調査回によってあまり大きく変わる事が無い、この順位が学部による「実用性」「共同性」の学生の印象の違いであると考えられる。

一方「学究性」における学部間の差異はおそらく「33. 多くのカリキュラムでは、具体的で実際的なものよりも、抽象的なものに重きがおかれている」「35. この大学では、実用的コースが設けられている」といったカリキュラムに関する質問項目によって生じていると考えられる。また、学究性は「学生は.....」で始まる質問項目と「教授は.....」で始まる質問項目がある。前者は学生一般への学究性評価であり、後者は教授の態度認知に関する項目といえる。これらは両方とも学部ごとに学生の学業に対する取り組み方、カリキュラムの違いなどから学部ごとの特色が強く出ていると思われる。

学年別

学年別に見た各領域得点は図6-3-2に示されている。「実用性」では、1年生12.4(+0.8)、2年生12.0(+0.9)、3年生11.5(+0.6)と下がり続けて4年生で11.7(+0.4)と少し戻すという同様のパ

表6-2 属性別の領域別得点

	実用性	学究性	共同性
全体平均	11.9	8.2	12.4
文学部	11.9	9.2	12.6
社会学部	11.6	6.7	12.2
法学部	12.1	7.8	12.2
経済学部	11.4	6.7	11.8
商学部	12.6	7.6	12.8
理工学部	9.9	8.9	10.4
総合政策学部	12.3	8.5	12.8
人間福祉学部	13.1	9.4	13.7
教育学部	12.0	9.6	13.0
国際学部	13.3	10.2	13.7
1年生	12.4	9.1	12.9
2年生	12.0	8.2	12.0
3年生	11.6	7.6	11.9
4年生	11.7	7.6	12.7
男性	11.7	7.6	11.9
女性	12.1	8.6	12.8
自宅	11.9	8.1	12.3
自宅外	12.0	8.3	12.6
参加	12.2	8.1	13.0
不参加	11.1	8.5	10.9
一般入試	11.8	7.8	12.1
センター利用	11.0	7.0	12.3
推薦入学	12.2	8.6	12.6
スポーツ推薦	12.6	10.1	13.7
その他	12.4	9.1	12.8

ターンが見られる。「学究性」においても前回と同様に1年生が一番高く、以降3年生まで低下。3年生と4年生には全く差がない(9.1(+0.5)、8.2(+0.3)、7.6(+0.5))。「共同性」においても前回と全く同様なパターンが見られた。1年生の12.9(+0.7)が一番高く2年生で減少12.0(+0.6)、3年生ではほぼ変化なく11.9(+0.5)、4年生で増加12.7(+0.4)となった。統計的には「実用性」には主効果がなく、学年間に有意な差は見られない。「学究性」においては主効果が見られ、1年生が2、3、4年生より得点が高い結果となった。「共同性」においても主効果が見られ、1、4年生が2、3年生より有意に得点が高かった。

さて、これを全体的に見ると2年前の前回調査の1年生は今回の調査の3年生、2年生は4年生に当たる。前回の1年生の得点と今回の3年生の得点の変化を領域別に見ると、「1年生→3年生」では、「実用性」-0.1、「学究性」-1.0、「共同性」-0.3、「2年生→4年生」では、それぞれ+0.6、-0.3、+0.4となっており、「実用性」「共同性」は1年生から2年後の3年生で1度下がり、一方2年生から4年生ではプラスに転じている。これに対して「学究性」では「1年→3年生」「2年生→4年生」共に得点が2年前より低くなっている。このパターンは前回調査でも前々回調査との比較で確認されている。このことから各調査回で見られる年次間の違いは、同一グループの経年変化を示している可能性がある。そうであるならどうして学究性得点は年次が進むにつれて低くなるのか、別の面からの分析と検討が必要であろう。

性別

男女別に見た各領域得点は、3つの領域でそれぞれ、男性11.7(+0.7)、7.6(-0.1)、11.9(+0.2)、女性12.1(+0.6)、8.6(+0.7)、12.8(+0.7)と3領域とも女性の方が男性よりも得点が高く、この関係は従来と同様の結果である。しかし、「実用性」では男女間の差は有意でなく、「学究性」「共同性」においては女性の得点が有意に高い。

住居別

自宅通学生と自宅外通学生の各領域得点については、「実用性」では自宅生11.9(+0.6)、自宅外生12.0(+0.7)、「学究性」では自宅生8.1(+0.3)、自宅外生8.3(+0.3)、「共同性」では自宅生12.3(+0.4)、自宅外生12.6(+0.7)となっており、これも前回とほぼ同様な結果であり、統計的にはどの領域にも差はない。

団体参加者別

団体参加者と不参加者の各領域得点については、「実用性」「学究性」「共同性」において、団体参加者が12.2(+0.7)、8.1(+0.4)、13.0(+0.5)、不参加者が11.1(+0.3)、8.5(+0.5)、10.9(+0.4)と、「実用性」と「共同性」で団体参加者が不参加者を上回っている。また、「実用性」の差は1.1ポイントであるのに対し、共同性では2.1ポイントと「共同性」における差が大きく、これも前回と同様である。この大きな得点差は団体に所属している方がより共同意識が高いことをうかがわせる。「学究性」に関しては、団体不参加の方が参加者をやや上回っているが他の2つの領域得点と比べると小さく、実際に「学究性」における差は統計的に有意ではない。

入試種別

入試種別毎に見た各領域得点については、全体的には一般入試とセンター利用入試の2つがどの領域でも得点が低いように見える。「学究性」と「共同性」においてはスポーツ推薦入試の得点が一番高い。統計的に見ると「学究性」の得点においてスポーツ推薦入試の得点が高い。この属性項目は今回から採用された項目であり、もう少し調査回を重ねないとこれらのトレンドが恒常的なものであるのかは判断できない。

図6-3-1 学部別領域得点

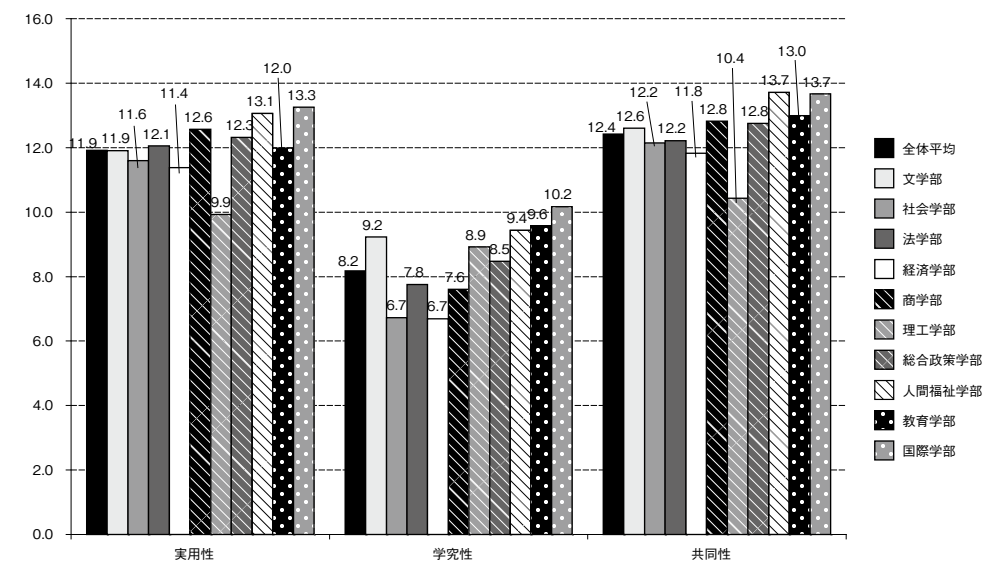
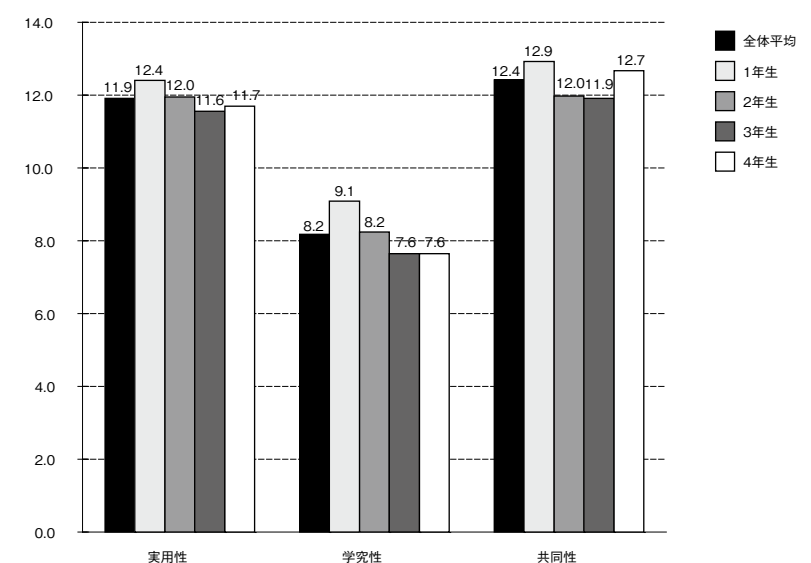


図6-3-2 学年別領域得点



7. 自由記述のまとめ

はじめに

この自由記述のまとめは、1982年10月に実施された第3回目のカレッジ・コミュニティ調査（以下CCA調査）の自由記述のまとめ「『自由記述』にみる学生の特質」（『総研ジャーナル』33号、文学部教授乾原正教授）で分類、報告された結果を参考とした。自由記述の目的は、「学生が自由に表現した記事の内容であり、それを分類し、分析するというミクロな考察がどれほど妥当であるかという問題を感じながらも、多くの学生によって労をいとわずに書かれた、彼らの“生の声”を広く伝える」ことにある。また、この自由記述は第2回調査（1979年10月実施）から実施され、前回の第16回（2010年）からは、ホームページにPDFで掲載し、この紙ベースの報告書には自由記述の内容のエッセンスを紹介することになった。

今回の調査では、これまでと同様に「この大学での授業や生活について何か思うことがあれば、自由にお書き下さい。」として10行の罫線を引いた約350字相当分の記述が可能な余白が提供された。

自由記述欄に書き込んだ学生は316名で、今回のCCA調査に応じて回答を寄せた1,098名の約29%にあたる。前回の第16回調査では1,014名の34%（343名）であった。記述者の学部・学年別内訳は表7-1の通りである。記述者の比率は多少学部によって異なっているが、学年進行にしたがって記述者が増加している。

記述内容の分類方法

「この大学での授業や生活について」に関する自由記述は、包括的な問いかけであることから内容は多岐にわたり、表現の仕方もさまざまであった。それゆえに内容を理解し、分類する作業は困難であったが、図7-1にまとめた。また、前回との比較は表7-2の通りとなった。図7-1の数値は各項目における記述件数であり、比率は記述者総数に対するものである。なお、1人の記述者が複数記述している場合もあるため、総記述件数は記述者総数を超えている。また意図がはっきり

表7-1 学部・学年別自由記述者数と比率（2012.10 第17回）

学部	1年生		2年生		3年生		4年生		計	
	人	(%)	人	(%)	人	(%)	人	(%)	人	(%)
神学部	1	(100.0)			1	(1.0)	1	(50.0)	3	(75.0)
文学部	9	(20.0)	17	(34.0)	12	(30.8)	17	(31.5)	55	(29.3)
社会学部	6	(15.8)	6	(20.7)	6	(22.2)	13	(27.7)	31	(22.0)
法学部	12	(30.0)	11	(34.4)	10	(32.3)	10	(38.5)	43	(33.3)
経済学部	7	(21.9)	6	(19.4)	9	(24.3)	12	(30.0)	34	(24.3)
商学部	11	(27.5)	7	(25.9)	10	(37.0)	12	(33.3)	40	(30.8)
理工学部	5	(25.0)	10	(71.4)	6	(35.3)	9	(37.5)	30	(40.0)
総合政策学部	6	(23.1)	8	(30.8)	5	(20.0)	10	(29.4)	29	(26.1)
人間福祉学部	3	(12.0)	3	(20.0)	5	(45.5)	6	(37.5)	17	(25.4)
教育学部	3	(16.7)	6	(33.3)	4	(28.6)	8	(40.0)	21	(30.0)
国際学部	6	(28.6)	2	(22.2)	5	(38.5)			13	(30.2)
計	69	(22.5)	76	(30.3)	73	(30.2)	98	(32.8)	316	(28.8)

$$\text{比率} = \frac{\text{学部、学年別の自由記述者数}}{\text{学部、学年別の有効回答票数}}$$

とつかめない内容のものも文脈から判断して分類した。

表7-3はこの分類項目を学部学年別に分けたもので、記述の多い6項目について網掛けをした。

今回の結果

図7-1に示すように、その他を除いた項目では多い順に、1. 施設設備（67件）、2. 他の学生への不満（43件）、3. 事務室への不満（42件）、3. 食堂・生協への不満（42件）、5. 満足感（39件）、6. カリキュラムへの意見（35件）、7. 授業の評価（31件）、8. 教員への不満（22件）、9. 通学の問題（21件）、10. 授業への出席・成績評価、テスト（20件）が前回1位から10位となっている。

続いて11. 学生観（17件）、12. 推薦・内部進学等入試への意見（15件）、13. ICT化（13件）、13. 喫煙の問題（13件）、13. 学費、経営問題への意見（13件）、16. 不満足感（11件）、17. 課外活動（10件）、18. 環境雰囲気よさ（6件）、18. キャンパス間の移動（6件）、20. クラス指定・予備登録への意見（5件）、20. 教育理念・教学方針（5件）への意見が11位から20位であった。

その後は、22. 国際交流（4件）、23. 教職員と学生の交流（3件）、24. キャリア教育・就職問題（2件）、24. 美化（2件）、24. 不安・悩み（2件）となっている。

前回との比較

表7-2で前回調査（2010年度実施）との比較をみると、今回の1番目から6番目までの項目（詳細は後述）は、それぞれ件数でも割合においても前回は上回っている。また「通学の問題」、「授業への問題、成績評価」「推薦・内部進学等の入試制度」「ICT化、（Webサービスの充実）」「不満足感」もそれぞれ前回より増加した。一方、前回より減少した項目では、「講義の評価、授業運

図7-1 分類項目と記述件数（2012.10第17回）

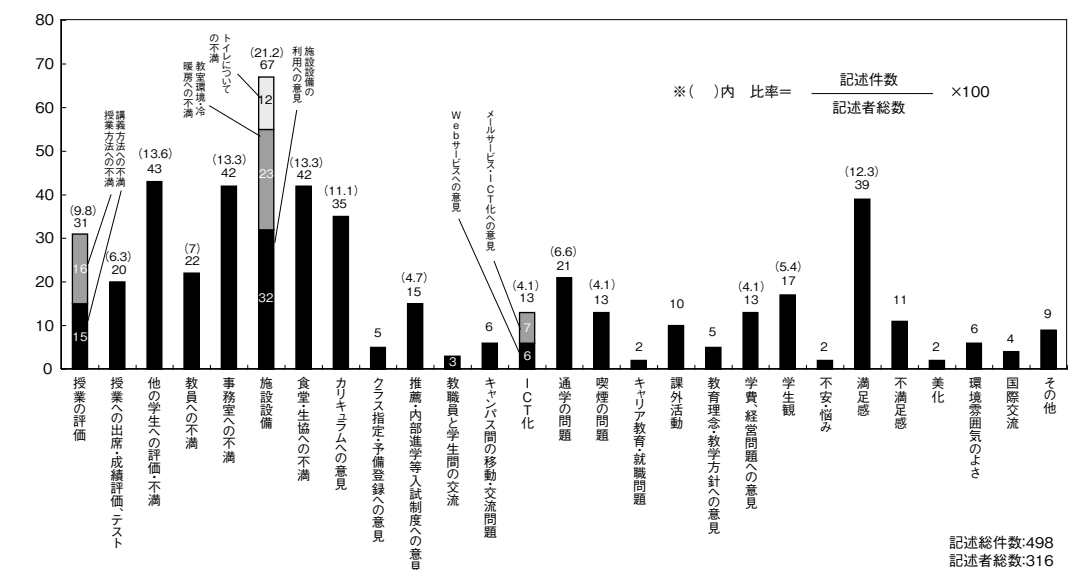


表7-2 分類項目の前回比較

	2010年 438件	2012年 478件
1	講義の評価、授業運営への不満(64) 14.6%	施設設備(67) 14.0%↑ 施設設備の利用への意見32、教室環境・冷暖房への不満23、トイレについての不満12
2	他の学生への評価・不満(32) 7.3%	他の学生への評価・不満(43) 9.0%↑
3	満足感(32) 7.3%	事務室への不満(42) 8.8%↑
4	食堂・生協の充実(29) 6.6%	食堂・生協への不満(42) 8.8%↑
5	教員への不満(26) 5.9%	満足感(39) 8.2%↑
6	事務室への不満(21) 4.8%	カリキュラムへの意見(35) 7.3%↑
7	施設設備(授業環境を含む)充実(20) 4.6%	授業の評価(31) 6.5%↓ 講義方法への不満15、授業運営の不満16
8	学生観(20) 4.6%	教員への不満(22) 4.6%↓
9	環境、雰囲気よさ(19) 4.3%	通学の問題(21) 4.4%↑
10	美化、禁煙の徹底(18) 4.1%	授業への出席・成績評価、テスト(20) 4.2%↑
11	カリキュラム(17) 3.9%	学生観(17) 3.6%↓
12	通学の問題(17) 3.9%	推薦・内部進学等入試制度への意見(15) 3.1%↑
13	授業への出席、成績評価(16) 3.7%	ICT化(13) Webサービスへの意見6、メールサービス・ICT化への意見7 2.7%↑
14	キャリア教育・就職問題(15) 3.4%	喫煙の問題(13) 2.7%↓
15	キャンパス間の移動・交流問題(15) 3.4%	学費、経営問題への意見(13) 2.7%↓
16	学費・経営問題への意見(13) 3.0%	不満足感(11) 2.3%↑
17	教育理念、教学方針(11) 2.5%	課外活動(10) 2.1%↓
18	課外活動(11) 2.5%	キャンパス間の移動・交流問題(6) 1.3%↓
19	施設設備の利用(9) 2.1%	環境雰囲気よさ(6) 1.3%↓
20	入試制度(9) 2.1%	クラス指定・予備登録への意見(5) 1.0%
21	Webサービスの充実(6) 1.4%	教育理念、教学方針(5) 1.0%↓
22	不安・悩み(6) 1.4%	国際交流(4) 0.8%↑
23	不満足感(5) 1.1%	教職員と学生間の交流(3) 0.6%
24	クラス指定、予備登録(5) 1.1%	キャリア教育・就職問題(2) 0.4%↓
25	国際交流(2) 0.5%	不安・悩み(2) 0.2%↓
26		美化(2) 0.2%

2010年その他(37)

2012年その他(9)

※件数の多い順()内件数(「その他」項目を除く)、比率= $\frac{\text{記述件数}}{\text{記述総件数(「その他」除く)}}$

営への不満」(前回1番目、64件14.6%)は、31件6.5%に半減し、「キャリア教育・就職問題」(前回14番目、15件3.4%)は2件0.4%にまで激減した。その他「教員への不満」(前回5番目、26件5.9%)は22件4.6%に、「学生観」(前回8番目、20件4.6%)は17件3.6%に、「環境、雰囲気よさ」(前回9番目、19件4.3%)は6件1.3%に、「キャンパス間の移動・交流問題」(前回15番目、15件3.4%)は6件1.3%に減少した。

多かった項目とその記述

1番記述の多い「施設設備」(前回7番目20件4.6%)は、67件14.0%に増加し、うち施設設備の利用への意見32件、教室環境・冷暖房への不満23件、トイレについての不満12件となっている。施設設備の利用では、図書館に関する記述(利用のルールやパソコン台数、開室時間)、教室の机、グラウンド、駐輪場、学生会館、無線LAN、寮、建物のライトアップなどに関する記述があった。教室環境・冷暖房では「教室の冷房が効きすぎて寒い」など空調に関する記述、トイレについては、「ウォッシュレット付きの大学が多い」「ABCD号館、4別、5別のトイレを明るく清潔にしてほしい」などの記述があった。

2番目の「他の学生への評価・不満」(前回2番目32件7.3%)は、43件9.0%に増加し、さまざまな評価や不満の記述があった。記述はマナー、学力レベル、プライド、意識に関わる問題として以下のようなものであった。「学生のレベルが低い」「社会問題に関心を向けている学生が少ない」「学生のモラルを向上させるのは難しい」「試験前などでは勉強するというよりも過去問題入手に時間を割いている」「積極性や意識、向上心が低いなど感じる」「FTA、TPPについて全く分からないと言われた時は本当にいらだちを感じた」「うるさすぎる学生、講義を聞かない学生が多すぎる」「一部の素行の悪い学生のために恥をかかされるのは不快である」「授業に出ず単位をもらっている生徒が多い」「図書館を利用する学生のマナーの悪さに目がいきます」「学生が授業を聞かずにずっと私語していることがある」「学生同士で学力格差のようなものを感じる」「講義中に私語をすることによって一生懸命勉強している学生を妨害している」「授業中の学生の話し声がやかましすぎて困っています」など。

3番目に記述の多い「事務室への不満」(前回6番目21件4.8%)は、42件8.8%に増加し、「高圧的で近寄りたいたい人が多い」「愛想もなく、不親切」「対応が横柄なように思う」「事務職員の態度が大きい」などの不満の記述があった。なお、一方、ある事務室では「親切、ていねいで質問もしやすかった」、キャリア相談では「相談しやすく、頼りになり心強い」といった記述もあったことも追記したい。

同じく3番目の「食堂・生協への不満」(前回4番目29件6.6%)は、42件8.8%に増加し、「業務時間が短い」「食堂が狭すぎる」「生協の接客態度が最悪」「食堂の収容可能人数に対して学生が多すぎる」「学生が昼食を食べられる部屋を増やしてほしい」「もう1つ食堂をつくってほしい」「食堂が汚い、メニューも増やしてほしい」「ひとりめしが快適にできる空間がほしい」などの記述があった。

5番目の「満足感」(前回3番目32件7.3%)は、39件8.2%に増加し、記述では、「恵まれた素晴らしい大学に変わりなく、とても有意義に学生生活を過ごさせていただいています」「関学に入

学して良かった」に代表される満足感や感謝の記述があり、記述者は3年生、4年生の高学年に多い。これは就職活動などで振り返りをした結果気づいたことが多いと推測される。

6番目の「カリキュラムへの意見」（前回11番目17件3.9%）は、今回35件7.3%で、次のような記述があった。「1年次より専門科目に触れさせる機会をつくって欲しかった」「免許を取りやすい時間割づくりを徹底して欲しい」「コース選択制カリキュラムが中途半端ですごく嫌です」「ゼミに皆が入れるようにしたら良いと思います」「4年になるまで受講できない学科の講義が存在します」「英語のみでの講義→英語で学ぶビジネスなどしてほしい」「同じ授業（必修）のもので教授によってレベルが違うので単位がとりにくかったり、GPAが低くなってしまったりするので不公平だと思う。なるべく同じレベルにしていきたい」「言語の必修化が私には理解できない・・・」といった記述があった。

その他の記述

記述の7番目から25番目の項目は以下の通りであった。その中から特徴的な記述を拾い上げて紹介する。

入試制度の多様化による学生の不満では、「入学後、授業や日常生活の中で、多くの生徒のレベルが低く思われた。入試方法を多様化することがこの原因になっているように思われる。」「大学や教授の中に一般入試の生徒とそうでない生徒をわけたがる。」「本当に問題なら、一般入試以外受け入れなければいいのでは?」「推薦入試などで受かった生徒が多く、・・・私語をしたり、マナーや常識がなっていない者が多すぎる。」「指定校推薦等による入学者が多すぎて学生の質が低下していることは言うまでもない。」「多彩な入学方式は支持できるものの、AOであれ、指定校であれ、スポーツであれ、一般であれ、全てハードルが低いと感じます。」「指定校や協定校推薦で入学してきた人が多くいることに大変衝撃をうけた。ひとえには言えないがレベルが違った。正直不公平であると思った。」「もう少し一般入試の比率を上げてほしい」といった記述があった。

次にキャンパスのICT化に関しては、「WEBと掲示する物がゴチャゴチャになっていて、どっちを見たらいいかわからないし、各部署の連携ができていないのでは?と感じる」「履修のシステムが非常に複雑で難しい。LUNAなどのWEBサービスで必要単位数の確認などが出来るようになれば・・・」「履修登録の期間なども学生にとって重要なお知らせはメールでも送ってほしいです」「履修登録する際に、シラバス上で「○曜○限」であるかをパソコンで見れるようにしてほしい」「休講情報をメールに送信できるシステムの説明を教学Webサービスに掲載して欲しいです」「終わってしまう奨学金、奨励金に関して学校のサイトに載せるだけでなく、メールなどの連絡がほしい」という記述があった。

喫煙の問題に関しては、「喫煙スペースが多すぎる」「歩きたばこや喫煙スペースからのたばこの煙は、とても気分が悪いです」「分煙するなら建物を作るなど煙が漏れないようにしてほしい」「喫煙所をなくすことが難しいなら、もっと人に迷惑にならない所を作り、それ以外の場所での喫煙は徹底的に取り締まっていたきたい」「禁煙になった場所にもかかわらず、喫煙している学生がまだたくさんいる」「喫煙スペースの場所をもっと考えるか、いっそのこと構内禁煙にしてほ

しい」という記述があった。

国際交流では、留学生と関わる機会に関して「関学に入学すれば、国際交流が頻繁に出来ると思っていたのですが、留学生と関わる機会があまりなくて少し残念です」「せっかく留学生がたくさんいるのに、全く交流できません。コーヒアワー以外にももっとたくさんの機会がほしいです」という記述があった。

不満足に関する意見では、「学生の意見を聞くだけでなく、取り入れて下さい。この3年間で私を感じる変化はありませんでした」「このようなアンケートが有効に利用され、我々の学生生活改善につながっていると感じられません」「このようなアンケートは生徒の意見があまり反映されないと思うので、意味が無いのではないかと思います」という不満の記述があった。

一方で環境や雰囲気に関しては、「雰囲気はとてもgood!!!」「大学の中央芝が大好きです。関西学院大学は自然が多くて素敵だと思います」「中芝、大好きです。小さい親子連れが遊びに来る光景は他大学にない良さだと思います」という評価の記述があった。

その他学生感に関しては、「恥を忍んで言うならば、もっと学生の面倒を見てほしい。我々はまだ社会に出ていない<子供>なのだから」、満足感に関しては、「私は、第一志望に落ちて関学に入学しましたが、関学での経験や学び、出会った仲間は私の誇りです」という記述もあった。

項目別学部、学年別の記述件数

以上の分類結果から表7-3の通り学部、学年別に項目別記述者数を求めた。ここで示された数値はサンプル数が少なく、これをもって記述内容の学部、学年の特質を指摘するには問題がありすぎる。示された数字は単なる分類上の材料にすぎない。ただ、記述項目の多かった6項目が各学部内で順位の逆転や学年別の割合の違いなどは学部の特徴として参考にしてよいのではないだろうか。

考察とまとめ

さまざまな問題、不満、評価の自由記述を表7-2によって第16回調査（2010.11）と今回（2012.10）の分類項目を比較してみると、講義方法への不満が減少し、カリキュラムへの意見や授業への出席や成績評価、クラス指定、入試制度への意見が増加した。またキャリア教育への意見は、大学の諸施策の結果からか激減し、一方でWebやメールサービスなどのICT化への要望、意見が増加した。事務室への不満、施設設備への不満や意見、他の学生への不満や意見が増加したが、その背景には、何があるのか。かつて大学では「学生を大人として扱うのか、それとも子供として扱うのか」という議論があった。それは学生が大人であるか子供であるかによって窓口での対応が異なるという考え方による。当時の結論は未成熟な大人として対応することであったが、それは大学側からすれば当時も今も変わらないのではないと思われる。しかし、一方で学生側からは、大学教育という商品を購入した消費者であるという意識が芽生えており、その視点から事務室の対応や施設設備を捉えるように変化していると思われる。近年米国のビジネススクールでは、「学生をお客様として扱うのか、学生として扱うのか」という議論があると聞く。同様に「お客様」であるのか「学生」であるのかによって窓口の対応が異なるという考え方

表7-3 分類項目別学部、学年別記述件数 (2012.10 第17回)

分類項目	件数	神学部	文学部	社会学部	法学部	経済学部	商学部	理工学部	総合政策学部	人間福祉学部	教育学部	国際学部	1年生	2年生	3年生	4年生
授業の評価	31		4	3	4	5	8	1	1	1	4		10	6	6	9
講義方法への不満	15		2		3	2	4	1	1	1	1		6	2	4	3
授業運営の不満	16		2	3	1	3	4				3		4	4	2	6
授業への出席・成績評価、テスト	20		5	4	3	1	2			1	3	1	3	9	5	3
他の学生への評価・不満	43	1	8	8	5	2	4	5	4	3	1	2	6	14	10	13
教員への不満	22		4	1	5	1	3	6	2				3	8	4	7
事務室への不満	42	2	3	2	6	8	9	2	4	1	5		3	9	10	20
施設設備	67		10	4	17	6	10	11	4	2	2	1	19	14	20	14
施設設備の利用への意見	32		5	2	5	2	4	7	3	1	2	1	9	9	4	10
教室環境・冷暖房への不満	23		4	2	5	3	4	4		1			6	4	10	3
トイレについての不満	12		1		7	1	2		1				4	1	6	1
食堂・生協への不満	42	1	3	3	8	5	8	2	1	2	9		11	9	14	8
カリキュラムへの意見	35		3		6	5	7	4	5	2	3		8	13	6	8
クラス指定・予備登録への意見	5				1		3				1			1	1	3
推薦・内部進学等入試制度への意見	15		3	2	3	1	3		1	1	1		3	3	2	7
教職員と学生間の交流	3				2						1		1		1	1
キャンパス間の移動・交流問題	6							3	2		1		1	3		2
ICT化	13		4	2		4	1	1				1	1	1	5	6
Web サービスへの意見	6		2			3	1								2	4
メールサービス・ICT化への意見	7		2	2		1		1				1	1	1	3	2
通学の問題	21		3		3	2	2	5	4		1	1	5	5	6	5
喫煙の問題	13		1	1	4	2	1	1		2		1	4	2	3	4
キャリア教育・就職問題	2						2								2	
課外活動	10		4	2				1		2	1		1	4	5	
教育理念・教学方針への意見	5				2	2			1					1	3	1
学費、経営問題への意見	13	1	3			1	1	1	1	2	3		1	3	2	7
学生観	17		5	2		1	1	2	2	1	1	2	5	4	2	6
不安・悩み	2					1			1				1			1
満足感	39		7	4	5	4	3	1	7	3		5	8	7	5	19
不満足感	11	1	4	2	1		1	1	1				2	4	2	3
美化	2		1		1										1	1
環境雰囲気良さ	6				1	1		1		2	1		3		1	2
国際交流	4		1				1		1			1	2	2		
その他	9		3	3		1			2				4	2	3	
合計	498	6	79	43	77	53	70	48	44	25	38	15	105	124	119	150

である。結論は、ある部分は「お客様」で、ある部分は「学生」であるということになるが、大学側にとっては、対応には、困難が伴う。どの部分をお客様として、どの部分を学生として対処すればよいか明確にできていないからである。現状では、ケースバイケースでポストモダンの対応が求められているということになるだろう。問題は前回触れたマーチントロー氏の高等教育システムの段階移行論におけるユニバーサル・アクセス型における多様化というところに行き着くのであるが、大学としての問題の対処や解決策は理論では片付けられない。

今回の自由記述にあげられた問題や不満は、自由記述欄に回答した一部の学生の問題として憤慨したり、嘆いたりしていただけるものではない。大学の差し迫った問題として、大学関係者が主体的に取り組まなければならない課題であろう。

最後に、今回の分析方法は、記述者のサンプル数としての問題、分類作業や統計的処理の吟味を欠き、分析としての限界がある。あくまでも課題を考えるための参考材料程度のものである点をご了解いただきたい。

なお、詳しい記述内容は、後日公開される高等教育推進センターホームページを参照いただきたい。

参考文献：

- (1) 乾原正 (当時本学文学部教授) 「『自由記述』にみる学生の特質」『総研ジャーナル』33号、総合教育研究室1983 pp.2-6
- (2) M.トロウ、天野郁夫・喜多村和之 (訳) 「高学歴社会の大学—エリートからマスヘー」東京大学出版会 1978 pp.51